

長崎県芦辺町文化財調査報告書 第8集

吉岐鳴分寺 III

1994

長崎県芦辺町教育委員会

壹岐鳴分寺跡発掘調査報告書 III



長崎県芦辺町教育委員会



遺跡近景



S B I



6284 A型式軒丸瓦

序 文

壱岐島は古代より対馬と共に、大陸への要衝として重要視され、下国ながら「国」として扱われたのは周知の事実あります。

この壱岐國の東部に位置します芦辺町は、弥生時代の著名遺跡である原の辻遺跡をはじめ大型古墳など数多くの文化遺産を保存しながら、「歴史と文化の町」として進展を続けております。

壱岐鷦鷯分寺（国分寺）跡は、昭和62年度より平成4年度までの期間、緊急調査を含めますと7次に及ぶ発掘調査を行い、鷦鷯分寺の全容解明に鋭意努力してまいりました。『延喜式』巻21玄蕃寮国分寺の条には「壱岐鷦鷯の氏寺を鷦鷯分寺となす」と氏寺を転用した旨の記述があり、前回の調査では8世紀中頃の、この氏寺時代の動きが証明されました。

本年度は、文化庁及び長崎県文化課のご協力により、更に寺域の究明をすべく100平方米の調査 sondを設定し調査を行いました。結果、製塙土器等の貴重な遺物の出土と生活遺構が検出されました。

今回で第8次を数える壱岐鷦鷯分寺跡発掘調査も、これをもって一応の区切りとすべく、本報告書を刊行する次第であります。今後はこれまで得られた多くの調査結果を基に保存整備を計りたい所存であります。

最後になりましたが、多年にわたりご協力を賜りました文化庁をはじめ県文化課並びに土地所有者の皆様、また島内外関係機関の各位に深甚なる謝意を表します。

平成6年3月

長崎県壱岐郡芦辺町教育委員会

教育長 野元茂生

例　　言

一 本書は、平成5年度に国・県の補助を受けて実施した巻岐島分寺の範囲確認調査の結果報告書である。

二 事業は芦辺町教育委員会が主体となり、調査は長崎県教育庁文化課が担当した。

三 本書の執筆は下記のとおりである。

I, II, III-3, IV 高野晋司

III-1, 2 福田一志

四 遺物の実測については、それぞれ各担当者が行ったが、遺物の写真撮影は福田による。

五 本書掲載遺物は、報告書刊行後芦辺町教育委員会に移管する予定である。

六 本書の編集責任は高野にある。

本文目次

I 序 説

一 調査経過.....	1
二 遺跡の地理的歴史的環境.....	3

II 遺跡の調査

一 土層堆積状況.....	13
二 遺構.....	14

III 出土遺物

一 土器・その他の遺物.....	19
二 瓦.....	25

IV まとめ.....

挿図目次

Fig. 1	遺跡位置図	4
Fig. 2	周辺遺跡分布図	5
Fig. 3	周辺地形図	12
Fig. 4	TP39 土層断面図	13
Fig. 5	炉址実測図	14
Fig. 6	TP39 遺構実測図	15
Fig. 7	試掘壕配置図	17
Fig. 8	須恵器実測図	20
Fig. 9	須恵器実測図	21
Fig. 10	製塩土器実測図	22
Fig. 11	土師器・輸入陶磁器実測図	23
Fig. 12	羽口・把手実測図	24
Fig. 13	石器実測図	24
Fig. 14	出土瓦実測図	27
Fig. 15	出土瓦実測図	28
Fig. 16	遺構別出土遺物時期変遷図	30
Fig. 17	遺構配置図	31

表 目 次

Tab. 1	周辺遺跡地名表	8
Tab. 2	周辺遺跡地名表	9
Tab. 3	周辺遺跡地名表	10
Tab. 4	周辺遺跡地名表	11
Tab. 5	出土瓦總量	26
Tab. 6	平瓦觀察表	26
Tab. 7	行基瓦觀察表	26

図 版 目 次

PL. 1	調査風景	39
PL. 2	遺構・遺物出土状況	40
PL. 3	出土遺物（須恵器）	41
PL. 4	出土遺物（須恵器）	42
PL. 5	出土遺物（須恵器・製塙土器・輸入陶磁器）	43
PL. 6	出土遺物（土師器・羽口・把手・石器）	44
PL. 7	出土遺物（瓦）	45

I 序 説

一 調査経過

壱岐芦辺町には、町内にある古代の遺跡を整備活用して今後の歴史教育や観光に役立てようとする史跡整備の構想がある。

これまでも、大塚山古墳^{註1}、カジャバ古墳^{註2}、鬼の窟古墳^{註3}等3基の古墳について積極的に整備や復元作業を行ってきたが、嶋分寺の整備は最も長期計画の事業ということができる。最終的には町内にある鬼の窟古墳に代表される大古墳群や、有名な原の辻遺跡などを結ぶ歴史ロードとも言うべきコースを設定する予定であると言う。

宅岐嶋分寺に関しては山口麻太郎氏による研究がある。古文献の解釈と明治初期の字図の検討、そして礎石と表採瓦の実見から、芦辺町国分本村触中野第1348番地を中心とする区域が嶋分寺跡に比定された。これらの実績から、この区域は昭和49年(1974)「壱岐國分寺跡」とし長崎県史跡として指定されている。

この場所が嶋分寺として比定されるにいたった理由として最も大きな要因は、古文書に記された事項と、それを証明する残存する礎石と表採された瓦の存在であろう。

瓦としては大正年間に採集された2点の軒平瓦がある。外区と脇区に珠文を持ち、瓦当に均整唐草文を配している。この他採集品には軒丸瓦も1点含まれているが、瓦当面の文様が識別出来ない程摩滅している。現在県立美術博物館に保管されている軒瓦がその内の1点である。摩滅した軒丸瓦の方は郷ノ浦町の壱岐郷土館に保管展示してある。

礎石は現在地には9個しか残っていないが、あと2個は中野触にある現国分寺の門の礎石として運ばれている他、隣接する国片主神社に1個ある。また東側山林にある墓地の中にも2個確認されているから都合14個が残存することになる。

それにしても寛保2年に編纂された『壱岐國統風土記』には「六十余個」とあり、幕末編纂の『壱岐名称図誌』には「廿余個」とあるから当初からすると凡そ五分の一に減じていることになる。しかしながら、少ないながらも礎石が残存していることや、古代瓦が採集されている事実は当該地が旧嶋分寺跡の可能性が高いことを示しているものと言える。

以上のような経過を経た結果、この壱岐嶋分寺の調査は、国と県費の補助を受けて昭和62年度から始まり、そして今年度まで7次の調査を行ったのである。本年度の調査では、寺域外と思われる場所に僧坊址の痕跡があり、新たな展開を見せてきた面もあるが、諸般の事情から一応本年度をもって範囲確認調査を終了することにした。まだ瓦窯址の所在地をつきとめる問題も残っているが、今後は国府の所在地を含めて再度検討する必要があろう。

註1 長崎県芦辺町教育委員会『大塚山古墳—環境整備事業報告書—』 1989

- 註2 長崎県芦辺町教育委員会『カジヤバ古墳』長崎県芦辺町文化財調査報告書 第3集 1988
- 註3 長崎県芦辺町教育委員会『鬼の窟古墳』長崎県芦辺町文化財調査報告書 第4集 1990
- 註4 山口麻太郎「巣岐」【新集 国分寺の研究 第5巻下 西海道】所収 1977
- 註5 長崎県芦辺町教育委員会『巣岐島分寺』長崎県芦辺町文化財調査報告書 第5集 1991
- 註6 『巣岐統風土記』寛保2年(1742)
- 註7 後藤正恒・吉野尚盛『巣岐名勝図誌』文久元年(1861)

二 遺跡の地理的歴史的環境

対馬と共に九州本土と朝鮮半島の間に飛び石状に展開する壱岐島は東西約15km、南北約17km、面積約140km²、行政的には現在4町に分かれ人口4万人を数える。弥生時代には「一支國」という国名と場所が一致する數少い国として『魏志倭人伝』に登場する。その中の記述「…至一大國，官亦日卑狗，副日卑奴母離，方三百里，多竹木叢林，有三千許家，差有田地，耕种猶不足食，亦南北市籠…」は当時の壱岐の状況が僅か45字で端的に説明している名文として名高い。

島は全体的に低平な溶岩台地であり、起伏は少なく最高所である岳の辻でも僅かに213mを測るにすぎない。全島が姫劍な対馬とは好対照をなす。島の基盤は第三紀層で、玄武岩がその表面を覆っており、島の要所要所にはその玄武岩の岩塊が良く見られ、弥生時代以降、箱式石棺や古墳の石室材として利用されている。10世紀頃の壱岐は『和名類聚抄』によれば、壱岐郡と石田郡に分かれ、壱岐郡には風本、名須、那賀、田河、鯨伏、瀧、伊宅、伊周駅家の八郷、石田郡には石田、物部、時通駅家、笠原、治津の五郷が記されている。壱岐鷲分寺が位置する場所は、この中の那賀郷に属するものと思われる。この地区は壱岐島のほぼ中央部に位置し、この地点からはどの方角にも車なら20分程で到達する。この周辺は後述する如く壱岐に於ける一大古墳密集地帯であり、古代においても同様に交通の要衝であったものと思われる。

ちなみに、室町時代15世紀頃の壱岐について、朝鮮人中叔舟によって撰進された『海東諸國記』¹²は、舞七で六百二十町、十三里、十四浦とある。戸数は1970戸から2200戸とあるから1戸5人で計算すると人口は1万人前後であったと推定されている。

澤田晋一氏は前述『和名類聚抄』記載の郷数から計算して、9～10世紀頃の壱岐について、六百二十町、人口1万人と推定されている。これによるとほぼ500年間は人口は横ばいで移行していたことになる。寛仁三年(1019)の所謂刀伊の入寇の結果、壊滅的な被害を受けた壱岐島について、『小右記』¹³は殺害された人148人、追い取られた女239人、遺留せる人民35人と記載している。合わせて僅か422人。この日記はその記事が甚だ詳密なことで知られているらしいが、それにしても信じられない程の少なさであり、被害の大きさを強調するための作為があったものと思われる。

周辺遺跡に目を転じて見よう。Fig. 2に示した如く、鷲分寺を含むこの一帯は壱岐に於ける古墳の最も集中する場所である。壱岐には且て338基があったという。現在確認している古墳の数はほぼ崩壊したものまで含めて256基である。掲載した4km四方の地図の中には112基の古墳が含まれている。壱岐で築造された古墳の半数がこの区域に集中することになる。時代を追って遺跡の説明をしておきたい。掲載した地図内には旧石器時代の遺跡は含まれていない。壱岐においては昭和50年までは明瞭な旧石器時代の遺跡は知られていなかったが、県教委による「原の辻遺跡」の範囲確認調査によって、ナイフ形石器や台形石器などが新たに発見された。平成2年度の壱岐鷲分寺の調査でも、1点ナイフ形石器が出土した他、平成5年度の調査でも同所からナイフ形石器や細石器が出土した。もともとこの地は当該時期の遺跡であったのだろう。

縄文時代の遺跡は、この地図内には含まれない。壱岐では縄文時代遺跡もまた希薄であり、昭和52

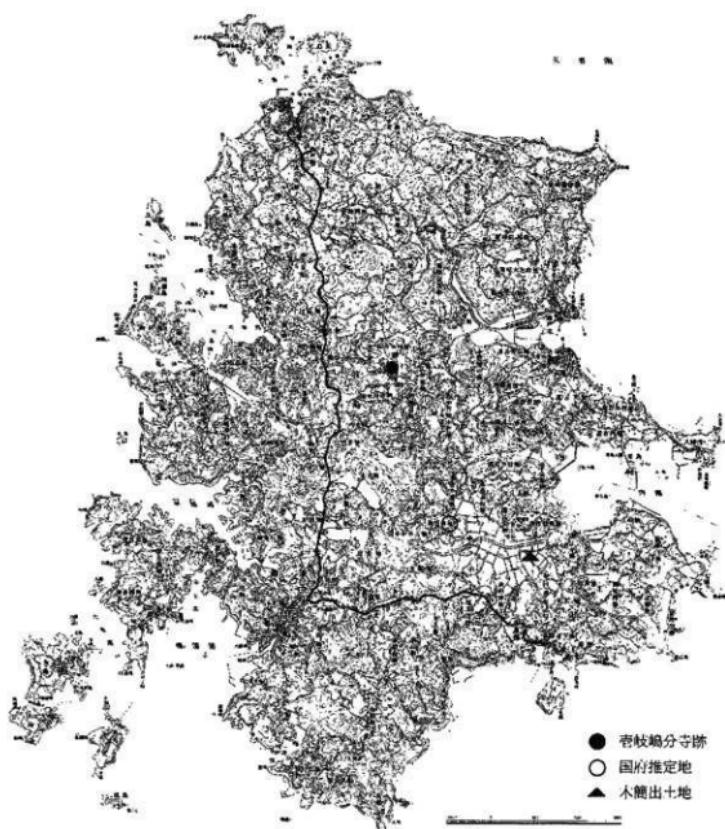


Fig. 1 遺跡位置図

年までは遺跡台帳にもその記載は1か所のみであった。現在ではある程度知られるようになったが、また調査例が少なく内容把握が十分とは言えない。

壱岐の遺跡が脚光をあびるのは著名な「原の辻遺跡」や「カラカミ遺跡」などの二大弥生遺跡が調査されたことによる。昭和23年以来の東邦考古学会や九学会による数回の調査と昭和49年以降の長崎県教育委員会による範囲確認調査は、この両遺跡が壱岐の弥生時代を代表する大遺跡であることをさらに証明したが、平成5年度からの圃場整備に伴う緊急調査では、丘陵を取り囲む3条の環濠が確認され、環濠内から出土遺物はこれまで知られていた豊富な鉄器や舶載鏡などの各種遺物に加え、木製盾や30本を越す銅鏡が出土するなど、防御を固めた一支国の中心集落にふさわしい遺物内容を持って

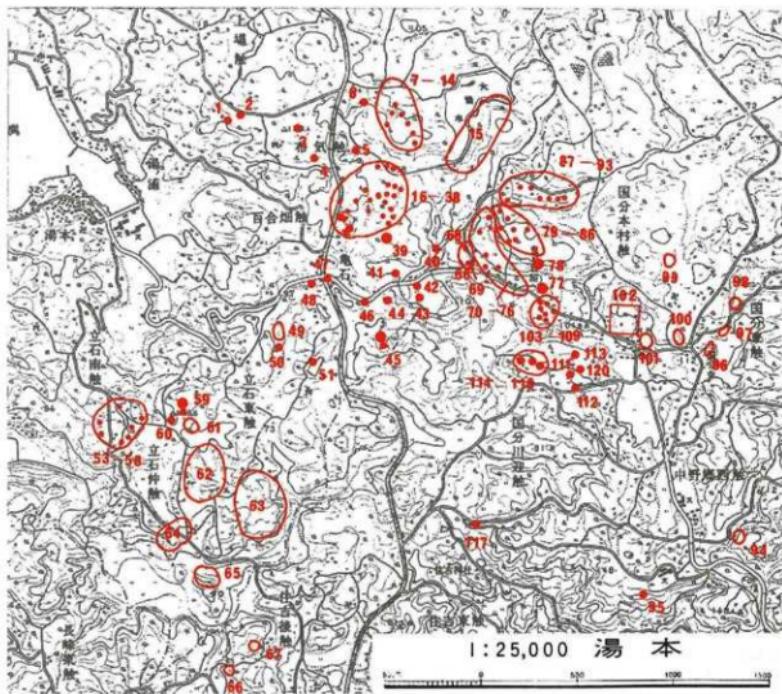


Fig. 2 周辺遺跡分布図

いる。平成6年度からは丘陵部の調査に入る予定であり、さらに調査成果が期待される。

古墳時代の遺跡は多いが、弥生時代から連続するわけではない。これまで確認された例では5世紀になって初めて高塚古墳が築かれる。^{註11}その中で芦辺町大塚山古墳は、5世紀代に築かれた数少ない古墳として昭和62年県史跡として指定された。

6～7世紀代になると古墳は飛躍的に増加する。Fig. 2に含まれる古墳の大部分はこの時期の所産であろう。また7～14の布気古墳群、16～38の百合畠古墳群、70～75山ノ神古墳群、79～88百田頭古墳群、87～93蓋古墳群など群集墳が顕著となる。

平成元年から平成3年度にかけて県教育委員会が実施した県内古墳詳細分布調査の結果では、壱岐において幾つかの新知見があった。まず39の笠塚古墳は直径38m、高さ10m程の円墳であるが、築造に際してはまず直径66m、高さ2m程の基壇状の造成を行った後盛土を行うという方法を取っていることが分かった。またこの古墳石室内からは金銅製金具を含む豊富な馬具や須恵器が見つかっている。^{註12}すでに開口してあった横穴式石室からの出土であった。77の鬼の窟古墳は羨道部天井石の修復に伴っ

て墳丘と石室の実測を行った。それによると、直径45m、高さ14m、石室は3室で全長16.5mの県内最大規模の大円墳であることが確認された。また、その石室構造は多少長さが異なるものの笠塚古墳の石室と設計が極めて似ていることが指摘されている。この周辺には二段構築で県内最大の規模を持つ45双六古墳が知られる。全長は約90mで、後円部の直径39m、高さ約10m、前方部の長さ44m、高さ4mという前方部がかなり長い低平な形の前方後円墳である。また双六古墳の西南西約1kmの地点に59対馬塚古墳が知られる。全長約65m、後円部直径は約30m、高さ約8m、前方部の幅は25m程度と推測される。壇岐の前方後円墳の中では古式に属するタイプであると思われる。^{註14}

このように、県下で最大規模の古墳は殆どこの区域に集中している。本書で報告する壇岐島分寺は、これらの古墳群から東へ僅か500mの地点に位置する。現況は標高100m前後のほぼ平坦地であるが、北側の山林を多少削平した痕跡があり、この結果、当該地には北側山林を背に東西60m、南北70m程度の平坦地が生じている。寺域を確保するための工事を行ったものと思われる。当該地はもともと緩やかな勾配を持つ山林であるが、湧水には恵まれており、2か所に豊富な水量を持つ井戸が掘られている。この地の東側には101壇岐直居館跡が隣接する。60m四方の敷地の回りには深い空堀を巡らす。古代豪族である壇岐直の居館跡に推定されている。現在の国片主神社である。

平成5年度の原の辻遺跡の調査で大きな新知見があった。遺跡を取り巻く環濠内から古代の木簡が出土したのである。恐らく、時期的にはすでに埋没してあった環濠部分に土壤を掘り、その中に廃棄されてあつたものであろう。木簡は5点あり、その記載内容には貢進の体裁のものがあった。その詳しい内容については、調査者からの正式な報告を待つとして、この木簡を解説された国立歴史博物館の平川南先生によると、木簡の内容や性質からいって、この周辺に國府を含む役所跡があるはずとの見解であった。國府推定地としては別に考えられている地点があり、また原の辻遺跡が弥生時代遺跡としてあまりに有名であり、且つこれまで古代の遺物が殆ど発見されていない遺跡であることから驚きを禁じ得ないのであるが、今後の調査が期待されるところである。

註1 池邊 勝『和名類聚抄都里群名考證』吉川弘文館 1981

註2 中叔舟『海東諸國記』田中健夫 岩波書店 1991

註3 横山 駿『壇岐の人口』『那馬台國人口論』所収 柏書房 1991

註4 濑田吉一『奈良朝時代民政經濟の歴史的研究』柏書房 1972

註5 「小右記」寛仁三年 東京大学資料編集所「大日本古記録」五 所収 1992

註6 「壇岐國統風土記」寛保2年(1742)

註7 長崎県教育委員会「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書 第26集 1976

註8 長崎県教育委員会「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書 第31集 1977

註9 長崎県教育委員会「カラカミ遺跡」勝本町文化財調査報告書 第3集 1985

註10 水野精一・岡崎 敦『壇岐原の辻弥生式遺跡調査概報』『対馬の自然と文化』所収 1959

註11 壇岐郡文化財調査委員会「大塚山古墳」 1983

芦辺町教育委員会「大塚山古墳」芦辺町文化財調査報告書 第2集 1987

芦辺町教育委員会「大塚山古墳—墓地整備事業報告書」など 1989

註12 長崎県教育委員会「県内古墳詳細分布調査報告」長崎県文化財調査報告書 第106集 1992

符塚古墳出土の馬具などの出土遺物については現在保存処理中。

註13 芦辺町教育委員会「鬼の窟古墳」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第4集 1990

註14 芦辺町教育委員会「壱岐鶴分寺 I」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第5集 1991

芦辺町教育委員会「壱岐鶴分寺 II」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第7集 1993

Tab. 1 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所 在 地	種 別	時 代	遺 構	・	遺 物	文 献
1	水ノ元1号墳	勝本町布氣字水ノ元	古 墳	古 墳	円墳、横穴式石室			1
2	ニ 2号墳	ニ ニ ニ	ニ	ニ	小さな墳丘が痕跡的に残る			1
3	明神山1号墳	ニ ニ 宇明神	ニ	ニ	円墳、竪穴式石室？ 大半は崩壊			1
4	ニ 2号墳	ニ ニ ニ	ニ	ニ	円墳、横穴式石室			1
5	掛木古墳	ニ ニ 字掛木	ニ	ニ	円墳、横穴式石室 玄室に削抜式家形 石棺あり			1・3
6	道元古墳	ニ ニ 字中尾	ニ	ニ	円墳、横穴式石室			1
7	布氣占墳群1号墳	ニ ニ ニ	ニ	ニ	横穴式石室 半壊 石室の一部が残る			1
8	ニ 2号墳	ニ ニ ニ	ニ	ニ	円墳、横穴式石室 線刻？			1
9	ニ 3号墳	ニ ニ ニ	ニ	ニ	円墳			1
10	ニ 4号墳	ニ ニ ニ	ニ	ニ	積石塚			1
11	ニ 5号墳	ニ ニ ニ	ニ	ニ	円墳、横穴式石室			1
12	ニ 6号墳	ニ ニ ニ	ニ	ニ	横穴式石室			1
13	ニ 7号墳	ニ ニ ニ	ニ	ニ	横穴式石室			1
14	ニ 8号墳	ニ ニ ニ	ニ	ニ	石室はない			1
15	大清水池遺跡	ニ ニ 字原野田・森尻	包 含 地	古・奈	奈良時代の製塙土器、須恵器			3
16	百合畠古墳群1号墳	ニ 百合畠	古 墳	古 墳	前方後円墳			1・3
17	ニ 2号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳			1
18	ニ 3号墳	ニ ニ	ニ	ニ	前方後円墳？			1
19	ニ 4号墳	ニ ニ	ニ	ニ	封土なし 横穴式石室			1
20	ニ 5号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳？横穴式石室			1
21	ニ 6号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳、横穴式石室			1
22	ニ 7号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳、横穴式石室			1
23	ニ 8号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳、横穴式石室			1
24	ニ 9号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳			1
25	ニ 10号墳	ニ ニ	ニ	ニ	須恵器出土？			1
26	ニ 11号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳、横穴式石室			1
27	ニ 12号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳、竪穴式石室？			1
28	ニ 13号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳、横穴式石室			1
29	ニ 14号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳、横穴式石室			1
30	ニ 15号墳	ニ ニ	ニ	ニ	前方後円墳？			1
31	ニ 16号墳	ニ ニ	ニ	ニ	前方後円墳？			1
32	ニ 17号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳、横穴式石室			1
33	ニ 18号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳、横穴式石室			1
34	ニ 19号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳			1
35	ニ 20号墳	ニ ニ	ニ	ニ	前方後円墳			1・3
36	ニ 21号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳			1
37	ニ 22号墳	ニ ニ	ニ	ニ	円墳			1

Tab. 2 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所 在 地	種 別	時 代	遺 様・遺 物	文 献
38	百合塚古墳群23号墳	勝本町百合塚	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室	1
39	笛塚 古 墳	〃 〃 字笛塚	〃	〃	円墳、横穴式石室	9
40	城 山1号墳	〃 〃 字城山	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
41	龜 石9号墳	〃 〃 字亀塚	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
42	双 塚1号墳	〃 立石東触字双塚	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
43	〃 2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
44	龜 石8号墳	〃 〃 〃	〃	〃	封土なし	1
45	双 六 古 墳	〃 〃 字双六	〃	〃	前方後円墳、横穴式石室	9
46	人 鹿 古 墳	〃 〃 字双塚	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
47	龜 石4号墳	〃 〃 字茶園元	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
48	〃 5号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、石室は崩壊	1
49	高 峰 遺 跡	〃 〃 字大石	包含地	弥・古	弥生土器、土師器、黒曜石剝片、磨製石斧	3
50	高 峰 古 墳	〃 〃 〃	古 墓	古 墓	円墳、箱式石棺、勾玉1、碧玉製管玉、白玉1、小玉1	1
51	大 石 古 墳	〃 〃 〃	〃	〃	封土なし、石室の一隅が残る 金環	1
52	龜 石1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、半分削られる	1
53	若 宮 神 社 古 墳	〃 立石仲触字立石	〃	〃	円墳、箱式石棺、鎧(短甲)、直刀、土器、人骨	2・3
54	一 本 松 古 墳	〃 〃 〃	〃	〃	横穴式石室 石室のみ残る	1
55	立 石 2 号 墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室 半壊	1
56	〃 1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室 半壊	1
57	布 代 2 号 墳	〃 〃 字右代	〃	〃	円墳、横穴式石室、石室不明、削平	1
58	〃 1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
59	対 馬 塚 古 墳	〃 立石東触字国柳	古 墓	古 墓	前方後円墳、穴式石室	9
60	四 合 古 墳	〃 立石仲触字立石	〃	〃	円墳、埴丘が残る	3
61	牛 神 遺 跡	〃 立石東触字国柳	墳 墓	弥 生	甕棺、箱式石棺	1
62	国 鄭 遺 跡	〃 〃 〃	〃	先~古	削石刃核、剥片巻、骨角器、敲石、弥生土器、須恵器、石錐	3
63	カラカミ 遺 跡	〃 〃 字カラ遺跡	包含地	弥 生	甕棺、V字溝、須恵器、弥生土器、土師器、陶質土器、銅鏡、骨角器	4
64	木 場 遺 跡	〃 立石仲触字鶴伏	墳 墓	〃	甕棺、箱式石棺	3
65	經 ノ 辻 遺 跡	〃 〃 字椿多	包含地	〃	V字溝、弥生土器	4
66	下 松 2号墳	芦辺町住吉後触字下松	古 墓	古 墓	円墳、横穴式石室 半壊	1
67	〃 1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、石室は後道のみ残る	1
68	柴 取 神 辻 2号墳	〃 国分本村触字飯塙国分	〃	〃	円墳、ゴルフ場建設のため完全消滅	1
69	〃 4号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室	1
70	山 ノ 神 古 墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室 ほぼ原形	1
71	山 ノ 神 1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	前方後円墳、横穴式石室玄室のみ残る	1

Tab. 3 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺構・遺物	文献
72	山ノ神2号墳	芦辺町国分本村触字京塚四分	古墳	古墳	円墳、横穴式石室 通路で半壻	1
73	〃 3号墳	〃 〃 字飯塚	古墳	古墳	円墳、横穴式石室 倉庫で半壻	1
74	〃 4号墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	円墳、崩壊している	1
75	〃 5号墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	円墳、横穴式石室	1
76	小オニヤ古墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	大部分壊滅	1
77	鬼の宿古墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	円墳、横穴式石室 宅紋最大古墳	1・6
78	兵瀬古墳	〃 〃 字兵瀬	古墳	古墳	円墳、横穴式石室 周溝あり	1・3
79	百田頭1号墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	円墳	1
80	〃 2号墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	円墳	1
81	〃 3号墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	円墳	1
82	〃 4号墳	〃 〃 字国分	古墳	古墳	円墳、横穴式石室 半壻	1
83	〃 5号墳	〃 〃 字饭冢四分	古墳	古墳	円墳、横穴式石室 船の跡刻	1
84	〃 6号墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	円墳、横穴式石室 ほぼ完全	1
85	〃 7号墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	円墳？ 小さな石で構築(ドーム状)	1
86	〃 8号墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	低平な封土 穩穴式石室？	1
87	益蓋1号墳	〃 〃 字益蓋四分	古墳	古墳	横穴式石室	1
88	〃 2号墳	〃 〃 字兵瀬国分	古墳	古墳	円墳、封土消失	1
89	〃 3号墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	円墳、横穴式石室 須恵器出土	1
90	〃 4号墳	〃 〃 字国分	古墳	古墳	円墳、横穴式石室	1
91	〃 5号墳	〃 〃 字兵瀬	古墳	古墳	円墳、両方削平	1
92	〃 6号墳	〃 〃 〃 四分	古墳	古墳	円墳、横穴式石室	1
93	〃 7号墳	〃 〃 〃	古墳	古墳	円墳 墳丘半分消失、横穴式石室 半分壊滅	1
94	通触遺跡	〃 中野郷西触	包含地	弥・古	弥生土器、須恵器、石斧、黒曜石、近世陶磁器	1
95	ムガカミ神社古墳	〃 〃 西触	古墳	古墳	円墳？ 横穴式石室 天井石露出 半壻状態	1
96	大谷 第2遺跡	〃 国分東触	包含地	弥・古	弥生土器、土師器、須恵器	3
97	〃 第1遺跡	〃 〃	古	古	弥生土器、土師器、須恵器	3
98	月院神社前遺跡	〃 〃	古	古	弥生土器、土師器、須恵器、青磁	3
99	館遺跡	〃 国分本村触字館山	古	奈・奈	たたら遺構、土師器、鉄片	5
100	大谷 第3遺跡	〃 〃 〃	古	古・鎌	黒曜石原石、弥生土器、土師器、須恵器、高麗青磁、鐵	3
101	壱岐氏居館跡	〃 国分国片主神社敷地	館跡	奈・平	空窓、土塁	3
102	壱岐島分寺跡	〃 国分本村触	寺跡	〃	基壇、甃石、瓦溜、軒丸瓦、布目瓦、須恵器、土師器等	8
103	京塚山1号墳	〃 〃 国分	古墳	古墳	円墳、横穴式石室	1
104	京塚山2号墳	芦辺町国分本村触国分	古墳	古墳	円墳、封土僅かに残存、空窓式石室 石材一部露出	1

Tab. 4 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所 在 地	種 別	時 代	遺 構	・	遺 物	文 献
105	京 駅 山3号墳	芦辺町国分本村船岡分	古 墳	古 墳	円墳、竪穴式石室			1
106	〃 4号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、石室の一端が露出			1
107	〃 5号墳	〃 〃 〃	〃	〃	封土なし、竪穴式石室?			1
108	〃 6号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、封土僅かに残る、横穴式石室 半 墓			1
109	〃 7号墳	〃 〃 〃	〃	〃	円墳、竪穴式石室			1
110	小 原1号墳	〃 四分川迎駁	〃	〃	円墳、横穴式石室 石室が見えている			1
111	〃 2号墳	〃 〃	〃	〃	円墳、半墓			1
112	カジヤバ 古 墳	〃 〃	〃	〃	円墳、横穴式石室 木棺			7
113	大 原3号墳	〃 〃 字大原	〃	〃	墳丘は残存しない天井石・側石が露出			3
114	平 原3号墳	〃 〃 〃	〃	〃	墳丘・石室とも半墓 石室内から土師器碗出土			3
115	大 原2号墳	〃 〃 〃	〃	〃	墳丘は残存しない天井石・側石が露出			3
116	〃 1号墳	〃 〃 〃	〃	〃	墳丘は残存しない一部を削平されて いるが、石室はほぼ完全			3
117	長 野 古 墳	〃 住吉東触長野上	〃	〃	墳丘東側の一部を削平 墳丘長10.0m 横穴式石室 天井石が落下			3

文献1 松永康彦 「壱岐島における古墳の現状」『壱岐』15号 壱岐史蹟研究会 1981

文献2 小出嵩士雄 「対馬・壱岐の古墳文化」『東アジア世界における日本古代史講座』第2巻 1984

文献3 長崎県教育委員会 「壱岐県遺跡地図」長崎県文化財調査報告書 第87集 1986

文献4 談本町教育委員会 「カラカミ遺跡」諫本町文化財調査報告書 第3集 1984

文献5 九州大学調査 1976

文献6 芦辺町教育委員会 「鬼の窟古墳」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第4集 1990

文献7 芦辺町教育委員会 「カジヤバ古墳」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第3集 1988

文献8 芦辺町教育委員会 「壱岐島分寺」長崎県芦辺町文化財調査報告書 第5集 1991

文献9 長崎県教育委員会 「県内古墳群分布調査報告書」長崎県文化財調査報告書 第106集 1992

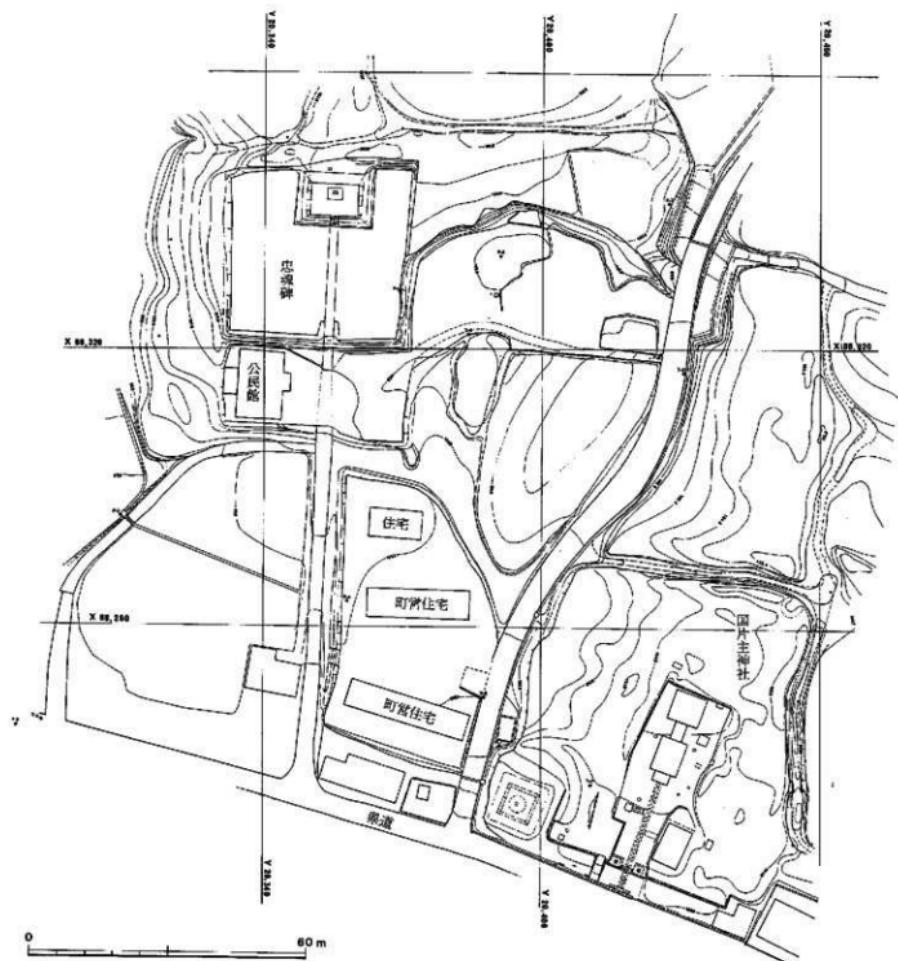


Fig. 3 周辺地形図

II 遺跡の調査

今年度の調査区は、推定編分寺域の南東側にあたる。これまで町営住宅敷地であったために小規模のテストピットしか設定できなかったものであるが、遺跡整備を前提とした町の方針で、古くなった住宅は移築されることとなったために設定が可能になった。

当該区域からは、昭和30年代の町営住宅地造成の折に多量の瓦片が出土したとの情報があったが、その事実の有無を確認するのが調査の大きな目的であった。

調査区は一番南側にある住宅の北側全面に $10 \times 10\text{m}$ のグリッドを1カ所設定することとし、T.P. 39とした。(Fig. 7)

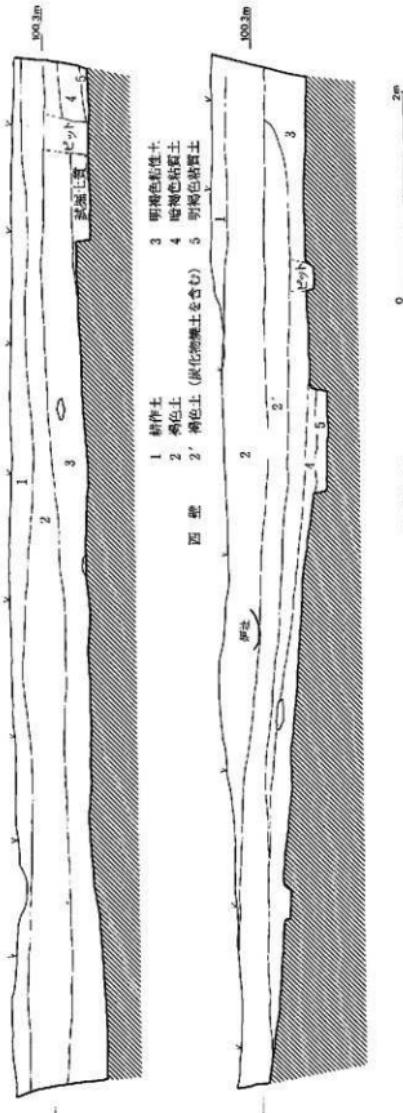


Fig. 4 T.P. 39 土層断面図

一 土層堆積状況 (Fig. 4)

T.P. 39の土層堆積状況を見ると、旧地表は南から北側へ向かって緩やかに傾斜しているのが分かる。しかし、町営住宅造成の折に南側部分を削平したせいで、南側部分1, 2層はすでに消失している。土層の堆積状況を説明しておくと1層は北側に3m程残るのみである。2層は粘性の無い褐色土で基本的に中世の遺物を含んでいる。厚さは本来は40cm程あったものと思われる。後述する炉跡はこの2層中に築かれた遺構で、土層断面にその底の一部がかかっているのが良く分かる。2'層は2層下部に堆積する層で30cm程の厚みを持つ。色調は2層と変わらないがその中に多くの炭化物を含むことから区別が可能である。

なお、この層は西側壁のみしか見られな

いことと、北側部分で上がりながら消失することから、何らかの遺構が存在していた可能性を示している。3層は明褐色の粘質土で島分守時期の堆積土層である。中に須恵器、土師器、そして瓦を多く含んでいる。

4層は暗褐色粘質土で今回の調査区では遺物を含まなかつたが、これまで当該地からは2点のナイフ型石器と1点の細石核が出土しており、5層の明褐色粘質土と合わせ当該期の包含層が堆積している可能性がある。

二 遺構 (Fig. 5, 6)

明確な遺構としては2層中に築かれた炉跡があった。この内1基は調査区の西側にあってその一部が西壁にかかっている。直径は60cmから90cm程の円形で、深さは12cm前後で、断面は凸レンズ状を呈している。内面にはぎっしりと炭化物が付着しており、頻繁に火を使用した痕跡が残る。中からは13世紀頃に比定される輸入陶磁器の破片が出土したが、これは2層の堆積時期と一致する。(Fig. 5)

調査区南西は上部を削平されているために確認できなかつたが、3層から4層上面にかけて製塩に伴う遺構があつた可能性が高い。それは、4層上面に厚く赤変した土層があり、その周辺に製塩土器が多く散在していたため、二次製塩遺構があつたものと推定される。当該地は推定島分守の寺域外にあたるが、何らかの僧坊関連施設があつたのではないかろうか。

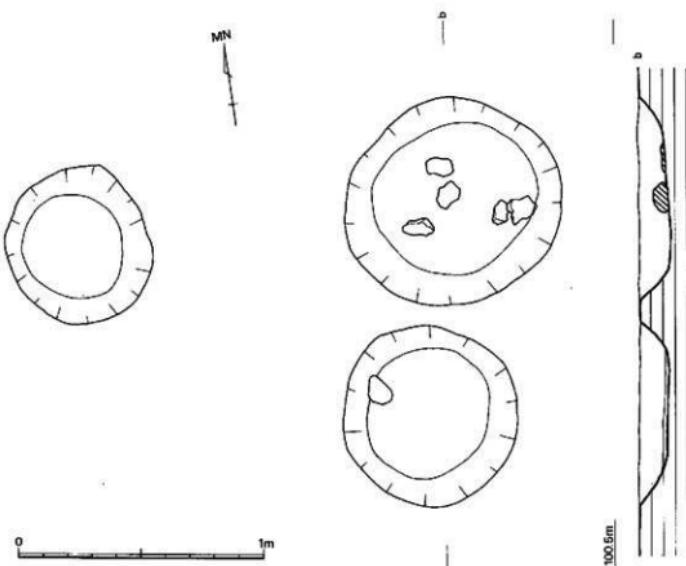


Fig. 5 炉址 (S X 3) 実測図

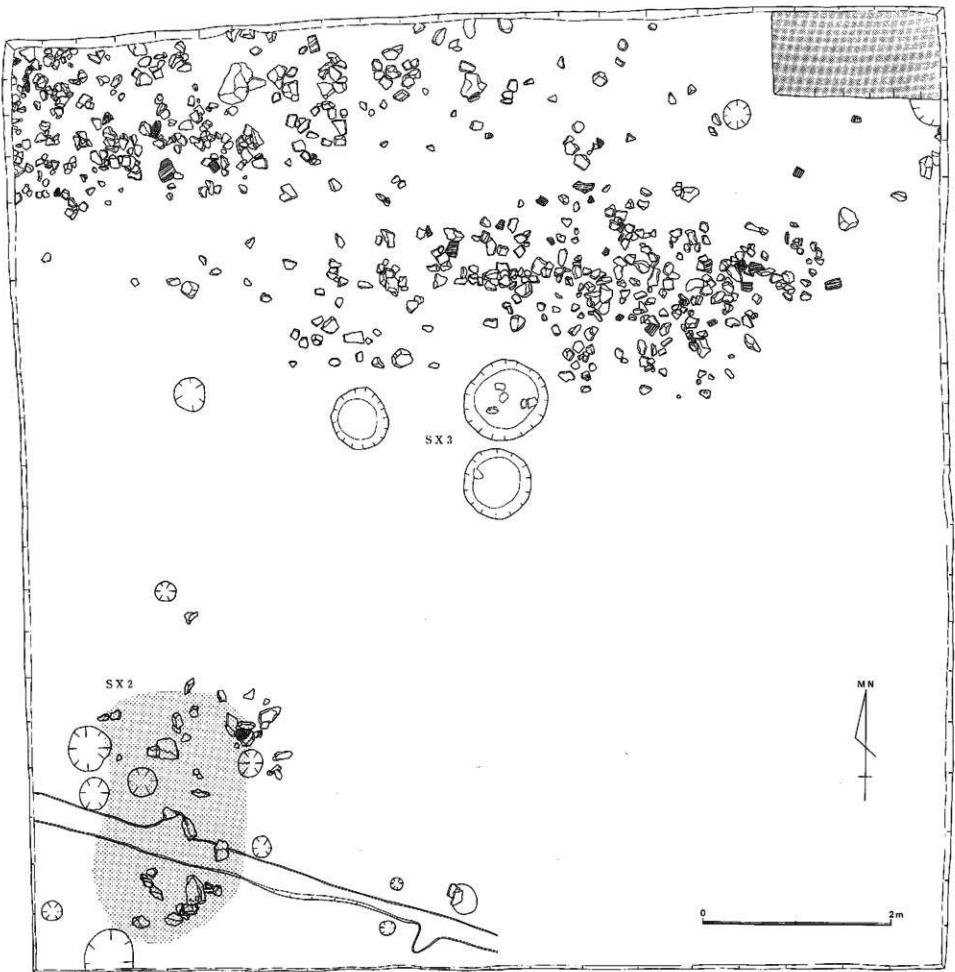


Fig. 6 TP 39 遺構実測図



Fig. 7 試験施設位置図

III 出土遺物

一 土 器・その他の遺物

須恵器、土師器、製塙土器、輸入陶磁器等が出土している。表土では輸入陶磁器を主体とし、2・3層から須恵器、製塙土器の出土がみられる。以下順に説明を加えたい。

須恵器：須恵器は多量に出土しているが、細片が多く復元可能なものは僅かである。器種としては蓋・杯身焼が表土から3層まで出土しており、時期的には8世紀～9世紀初頭までの所産と考えられる。Fig 8・9は蓋及び杯身の破片である。Fig 8、①～⑧、⑩が2層出土、⑪～⑯、⑯・⑰は3層出土、Fig 9の⑰～⑲が2層、⑳～㉓までが3層出土である。蓋については全体的に天井部が低く、口径が大きいのが特徴で、口縁部は丸く納める傾向にある。すべて⑰のような宝珠形のつまみを持っていたものと思われる。⑯は陶質土器で、つまみのつく高杯の蓋であろう。天井部には半円状の刺突文を施し、口縁部に二条の丸い沈線、口唇部は丸くなめている。他のものに対して時期的に古い段階に位置するであろう。杯身は高台が体部側につく退化傾向のものが多く、6次までの調査の遺物と同じ様相のものである。

製塙土器：第1次～6次までの調査の中で製塙土器の出土は第4次調査のTP-29出土の2点のみであり、他では出土していない。今回の調査では、細片ではあるが製塙土器が多量に出土したことは、遺跡を考えるうえで新たな問題を投げかけている。

①は1.2cm程の厚みをもち、胴部下位にあたる。外面ともに叩き締めを行っているが、外面は擬似格子文を縦方向に規則的に施しているのに対し、内面は細かな六条を単位とする波形の叩きを縦横に不規則に叩き出している。胎土は外面赤褐色を呈し、内面は暗灰褐色を呈する。全体に石英粒があり、砂質に富み、焼成は雜である。③も①と同様の叩きが内外面ともに施されるが、外面の叩きは①より既して雜である。胎土、焼成、厚みなど①に酷似している。厚みなどからみると⑥も①・③に近似するが、①・③に比べ焼成良好で堅歛である。表面は黄褐色を呈し、口縁部下の頸部から胴部へと続く部分である。肩部及び内面は叩き痕は認められないが、肩部より膨らむ部分に数条の叩き痕が見られるなど、他の製塙土器とは明らかに相異する特徴をもつ。⑨についても⑥ほどではないが焼成良好で胎土は赤褐色を呈す。頸部から胴部への破片で、胴部との境に2本の浅い沈線をめぐらせ、下段の沈線下の縦方向に擬似格子文が観察される。②・④・⑤・⑦・⑧・⑩については、薄身であることで共通し、①・③・⑥などとは器形や、大小の差異などがあったと考えられる。しかし、外面及び内面の叩きはすべて玄海灘式製塙土器に特徴的な擬似格子文が基本であり、同一層からの出土であるため、すべて同一時期の所産としてさしつかえないと考える。

土師器：⑭は頸部に最大厚をもち、胴部が直線的に延びる特徴を持つ。口縁部内側は外湾して頸部内側との間に陵をもち、内湾して胴部へと続く。灰黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。⑮は赤褐色の

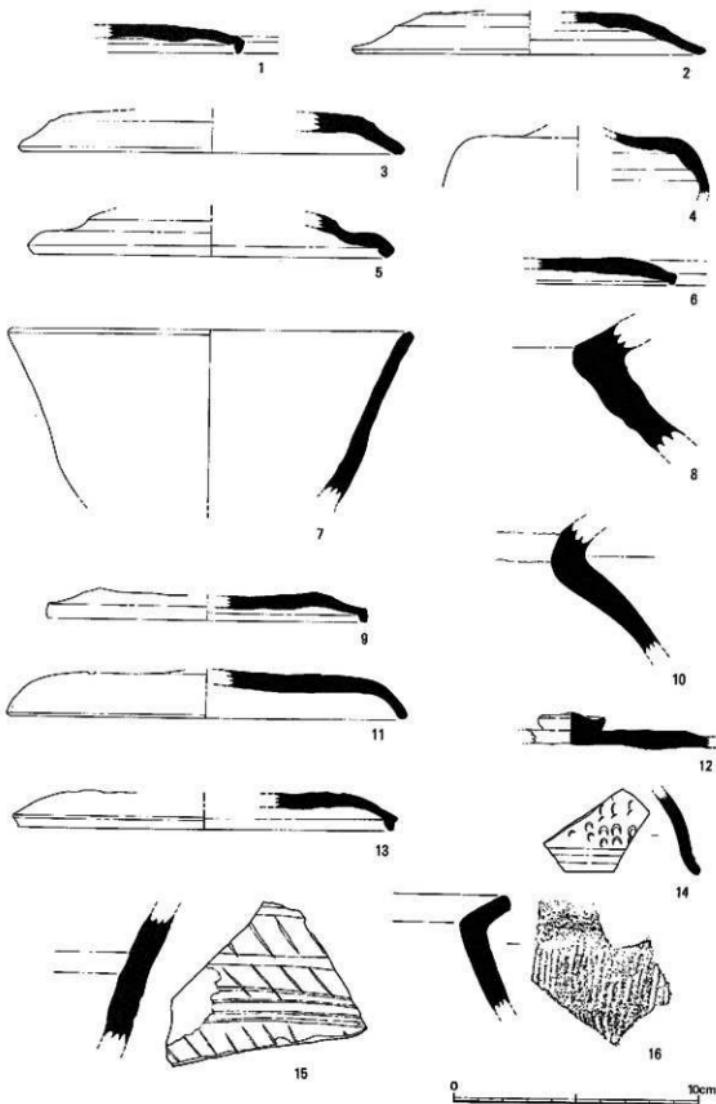


Fig. 8 須惠器実測図

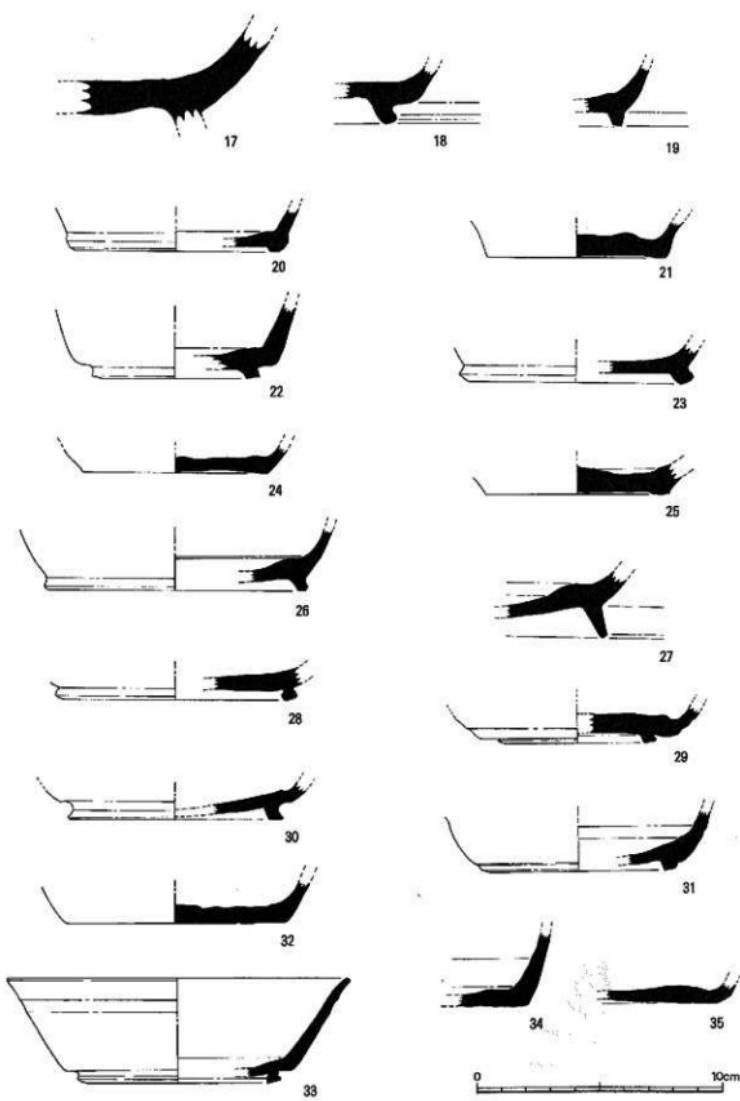


Fig. 9 須恵器実測図

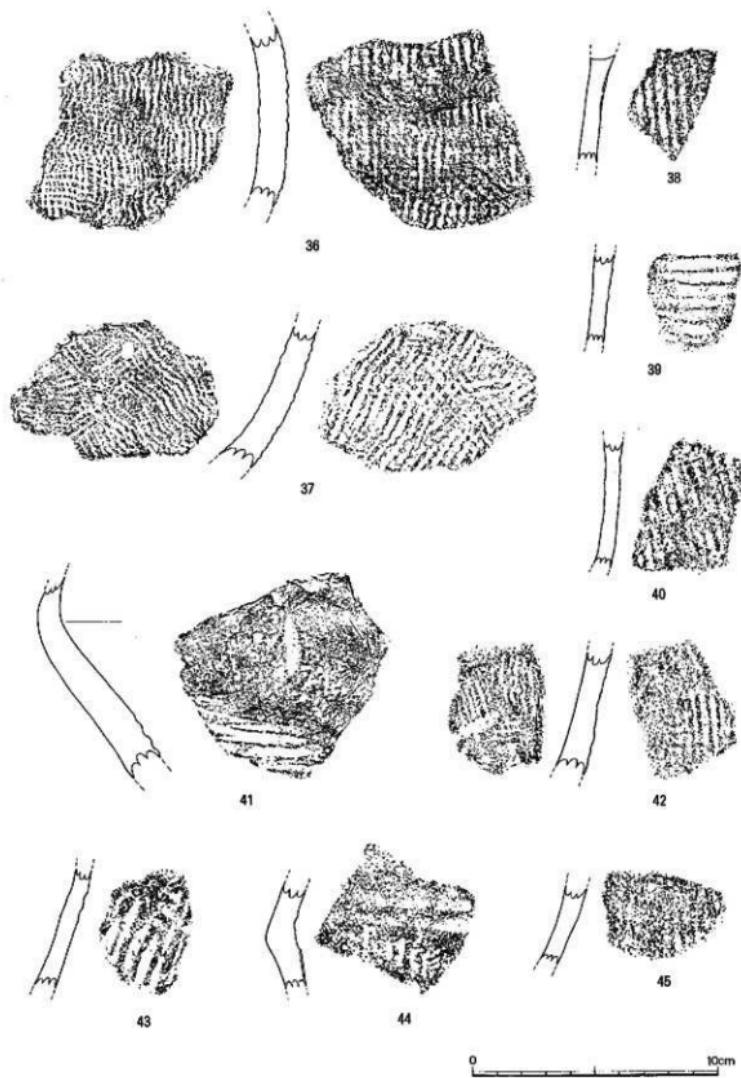


Fig. 10 製塩土器実測図

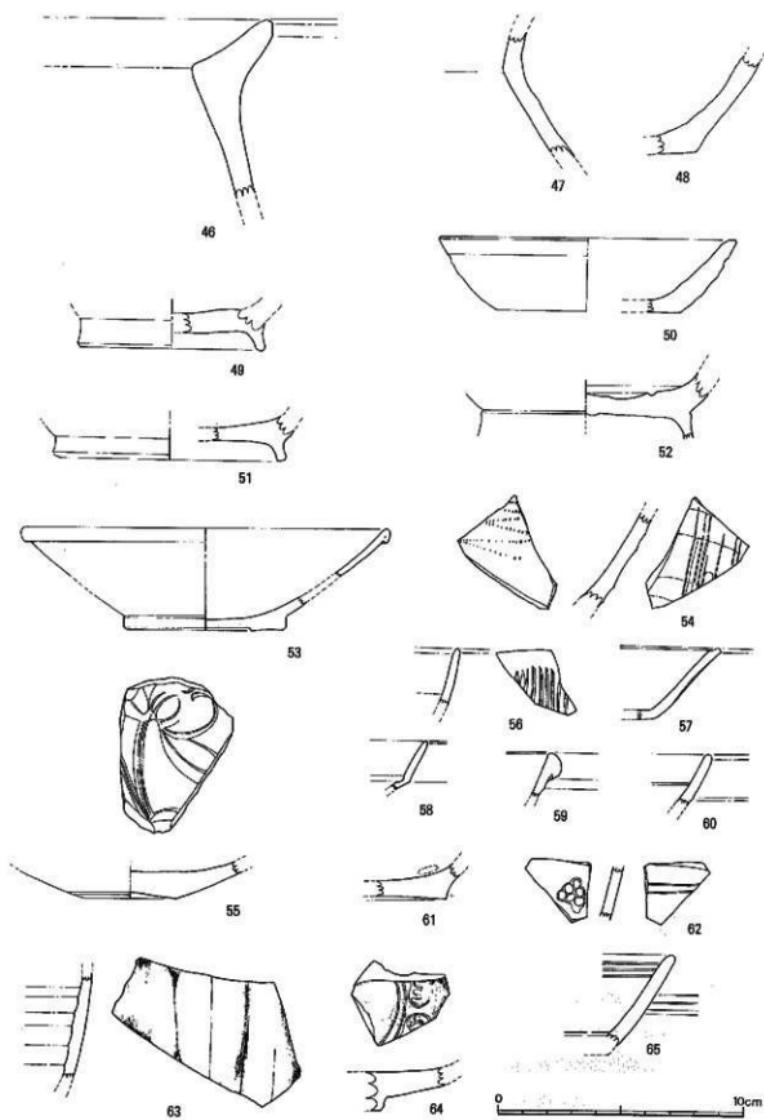


Fig. 11 土器・輸入陶磁器実測図

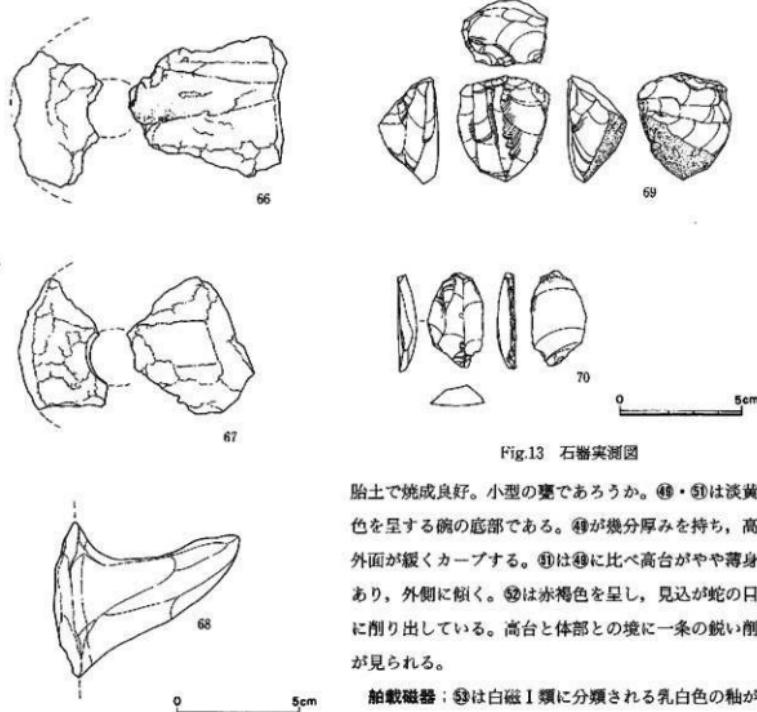


Fig. 12 羽口、把手実測図

Fig. 13 石器実測図

胎土で焼成良好。小型の壺であろうか。⑥・⑦は淡黄褐色を呈する碗の底部である。⑧が幾分厚みを持ち、高台外面が緩くカーブする。⑨は⑧に比べ高台がやや薄身であり、外側に傾く。⑩は赤褐色を呈し、見込が蛇の目状に削り出している。高台と体部との境に一条の鋭い削りが見られる。

舶載磁器：⑪は白磁I類に分類される乳白色の釉がかかった小碗である。底部は蛇の目高台で釉を搔きとつて、疊付から高台際、高台と胴部との間は鋭く削られ

ている。口縁部は緩いカーブを描くが、直線的である。口唇部はまるく納められ、中央にビンボールが認められる。荊州窯とされるものであろう。この手の遺物は2個体分出土している。⑫は同安窯系I類に属する碗の体部破片である。外面に細かい櫛目によるジグザグ文様を有する。⑬も⑪と同様で外面に櫛目を施した碗の口縁部である。内面に沈線が入り、そこからやや内側に屈曲する。⑭は口縁部に釉がかからない口禿の白磁碗である。底部にまで釉がかかることから区I類に属するものであろう。⑮はI-1a類に属する同安窯系の青磁小皿である。⑯はIV類の玉縁の白磁碗である。⑰は青磁III類に分類されるものの底部で、内底見込に片切形の花文を施す。底部直上に一条の沈線をめぐらせていている。⑲は越州窯系の碗で蛇の目高台となるものであろう。内外面に目跡が残り、外底部は切り放したときの搔き取り痕が残る。⑳・㉑・㉒・㉓は李朝粉青沙器である。㉔は水注等の胴部であろうか。外面は黄褐色の釉がかけられ、釉溜まりは黒褐色を呈する。内面はロクロ整形で水洩き痕が残る。

その他の遺物として、⁶・⁷の羽口、⁸の把手など焼土遺構や、製塩土器との関連が考えられる遺物も出土している。⁹・¹⁰は旧石器時代の遺物で、⁹が漆黒色の黒曜石を使用した小型の石核である。打削が約45°の急傾斜をなし、調整を行ってから剥離をしており、よく整っている。¹⁰は一側面のみにプランティング加工を施したナイフ形石器である。素材的には黒曜石を使用しているものの、¹⁰の石核とは別個体と見られる。旧石器時代の遺物は2点であるが、第4次調査の際にも小型のナイフ形石器が出土しており、IV層中にナイフ形石器の文化層がある可能性も考えられよう。

以上、土器、石器について見てきたが、遺物の年代については、1次～6次出土の土器と同様であり、遺構の年代と符合するものである。ただ今回の調査により出土した製塩土器、焼土遺構とが、鳴分寺とどのような関係にあるのかについては今後検討する必要があると考える。

二 瓦

第7次調査でも注目すべき瓦の出土はなかったと言っても過言ではないが、予想していなかった地点からある程度まとまった資料が出土したので掲載しておきたい。ただし、軒丸瓦や軒瓦などの目立った資料は含まれないため、特に詳細な説明は省略し、図示した資料については一括して表中で説明しておくこととする。なお、前回の報告書で出土瓦については一応の分類をしておいたので、今回もそれに従う。

出土した瓦は、平瓦と丸瓦の2種類であり、このうち丸瓦は全て行基式である。

平瓦は凸面調整の紋様から3種類に分類できる。平瓦の分類は以下のとおりである。

I類 凸面をカキ目状に調整する

II類 凸面に繩目の叩きがあるもの

III類 凸面に格子目の叩きがあるもの

また、各種瓦の内、平瓦の分割後の側縁調整は以下の基準で分類する。

a 分割に際して残る破面を単に割ただけのもの

b 分割面の凸面側を面取りするもの

c 分割面の凹凸面側共面取りするもの

d 分割面の凹面側を面取りするもの

次に丸瓦は全てが行基瓦であることは前述したが、その分割後の側縁調整は以下の基準で行なう。

a 基本的に分割面をそのまま残すか、凹面側を小さく面取りする。

b 分割面の凸面側を大きくへら削りする。

c 分割面の凹凸面に小さな面取りを行なうもの。

d 側縁が鉛直方向に向くもの。

なお、その他の表中の分類の中で使用する語句は基本的には奈良国立文化財研究所、及び佐原 真氏の論文に従う。

Tab. 5 出土瓦総量

	丸 瓦		平 瓦								計(kg)	
	行 基		I 類		II 類		III 類		不 明			
	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤	灰	赤		
T P 39 H	0.3	0.5		1.6	0.1				0.3	1.0	3.8	
H II	0.3	0.3	0.1	2.5		0.3	0.2	0.1	0.1	0.3	4.2	
H III	1.0	8.5	0.1	21.0	0.1	2.5		0.6	0.1	3.0	36.9	
計	1.6	9.3	0.2	25.1	0.2	2.8	0.2	0.7	0.5	4.3	44.9	

註1 奈良國立文化財研究所『瓦編1 解説』奈良國立文化財研究所基準資料I 1974他

註2 佐原 真「平瓦桶巻作り」考古学雑誌第58卷第2号1972

Tab. 6 平瓦観察表

図 番号	出土区	断 面形	粘 土	粒 子	繊 維	目 向	布 目 数	縦 横	絶 縁	厚	長	幅	色 調	焼 成	胎 土	凸 面原体 種類	備 考
Fig. 1	T P 39 2層下面				繊				c	1.8			赤紫色	良		I 類	
Fig. 2	T P 39 3層瓦面	枚			H	22	19	d		1.8			灰褐色	良		I 類	布縫じ痕
Fig. 3	T P 39 H				H	21	19			2.0			灰褐色	良		I 類	H
Fig. 4	T P 39 2層下面				H	20	18	c		2.0			赤褐色	良		I 類	H
Fig. 5	T P 39 2層瓦面	繊卷	2.0		H	18	19	b		1.8			灰褐色	甘い		I 類	布縫じ痕が 横
Fig. 6	T P 39 2層	H	3.0		H	18	18	a		2.0			H	良		I 類	
Fig. 7	T P 39 3層瓦面	一枚			H	20	18	a		2.0			H	良	精 選	I 類	
Fig. 8	H									2.0			赤褐色	甘い		1類+田畠	
Fig. 9	H									2.0			H	甘い	石英粒	I 類	凹面磨滅
Fig. 10	H								b	1.8			淡黃褐色	H		II 類	H

Tab. 7 行基瓦観察表

図 番号	出土区	粘土 方向	系切 縫目	布目 数	縦 横	擦 傷	瓦 端	径	重 量	円筒径 広端 狭端	色 調	燒 成	胎 土	凸 面調整	備 考
Fig. 11	T P 39 3層瓦面	繊				a	1.6			5.0	赤紫色	良	石英粒	タテ	
Fig. 12	H	H	14	15	a		1.8			8.5	赤褐色	良	精 選	ヨコナデ	
Fig. 13	T P 39 2層下面		18	16							H	甘い		H	

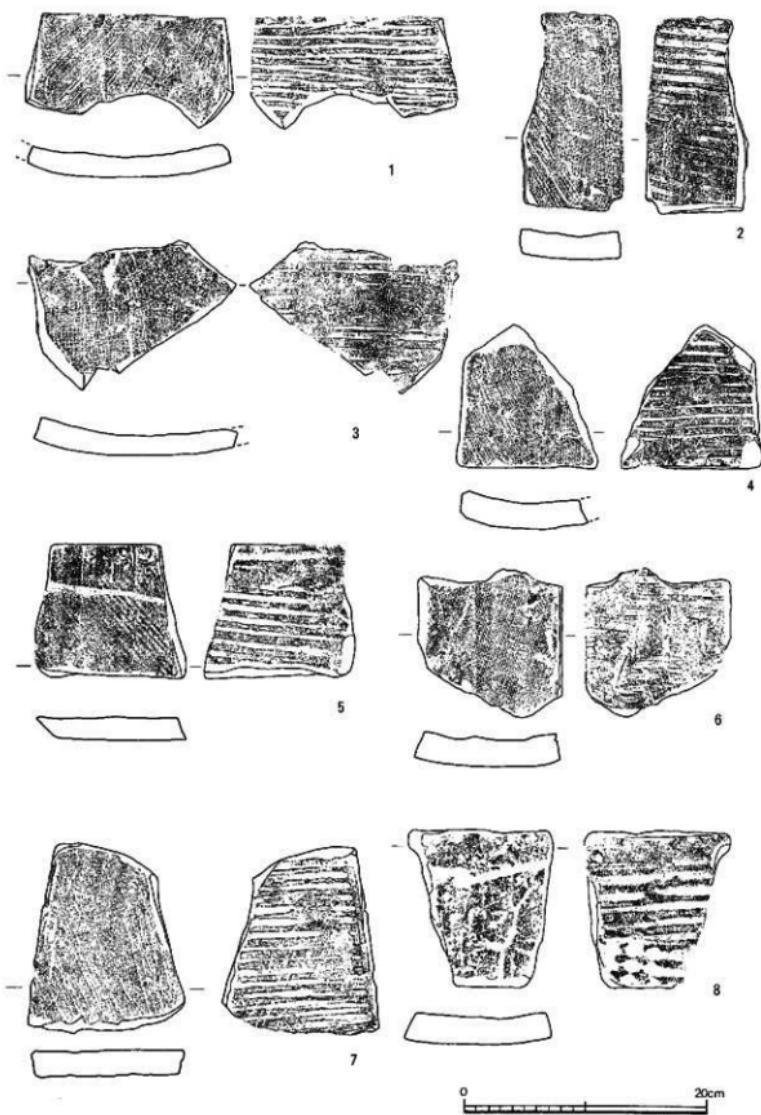


Fig. 14 出土瓦实测图 (+)

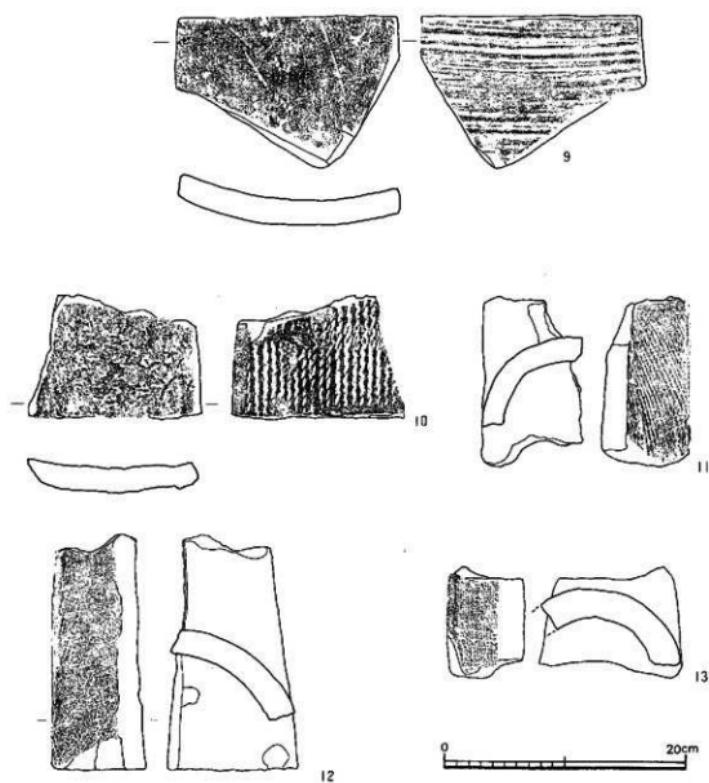


Fig. 15 出土瓦実測図 (±)

IV まとめ

昭和62年度から実施した宍戸嶋分寺の調査も平成5年度の範囲確認調査をもって一応終了することになった。

これまでの調査結果と成果については、既に2冊の報告書にまとめてあるが、最終年度の報告書ということもあり、今年度の調査結果も含め多少内容を重複させながら総括をしておきたい。

宍戸嶋分寺は国分寺建立の詔によって新たに作られた官寺ではなく、在地豪族であった宍戸直の氏寺を国分寺に転用したものであることは、『延喜式』⁽³⁾〔玄蕃寮〕に「宍戸島直氏寺為島分寺。僧五口」という記録から明らかである。したがって嶋分寺として機能する前には宍戸直の氏寺の存在を考えられる。

『類聚三代格』⁽⁴⁾によると、天平十六年(744)にはすでに宍戸嶋分寺建立の計画はなされているらしいが、天平勝宝八年(756)『續日本紀』の記録に言う諸国の国分寺に仏具の領賜があった中に宍戸嶋分寺の名は無かったことからも、実際に国分寺として機能した時期はそれより後のことである。出土遺物と文献から判断すると、8世紀後半以降から9世紀始め頃と推定される。そうであれば、それ以前の建物がまさしく宍戸直の氏寺に相当するものと見て良いだろう。

これまでの一連の調査によると、須恵器が出土し始める時期は7世紀末頃からであるが数片程度であり、一定量が出土するのはそれ以降のことになる。各遺構を時期的に並び換えてみる。

まず、創建時期の遺構としてはSB1, SB8が考えられる。8世紀前半頃には比定される。SB1周辺からもその時期の須恵器が出土しているが、あまりに少量であり確認できない。8世紀中頃から後半になると版築基盤を持つ建物SB1と、門跡と考えられるSB9が作られている。嶋分寺として機能し始めた時期を前述した頃に考える事ができれば、以上の時期の遺構が宍戸直の氏寺に相当することになるから、この時期を氏寺期と仮称しておく。そしてこれまでに出土した平城様式6284A型式の軒丸瓦は時期的に見て、もともとはこの頃の氏寺を飾った瓦であったのではないかと推定される。

しかし、この種の瓦の出土数量の僅少さと一種類だけしか見られない状況からすると、極めて象徴的な使われ方の可能性が考えられるのであり、更に、このタイプとは異種の范木を新たに製作した事実は見られないことから、この平城様式の瓦は一時的に作られたが、継続して焼かれていなかったようである。平城宮で使用されていた時に既に傷が入っていた范木が、これ以上使用に耐えられなくなつた可能性がその理由として考えられる。

8世紀後半以降になると、建物としては回廊跡に推定されるSB2が新たに作られ、さらに、一段高くなった北側山林にSD5の溝が作られるようになる。さらに8世紀末頃になると生活関連遺構としては、二次製塩を行なったSX2が知られるようになる。この時期を嶋分寺転用期と考え、嶋分寺期と呼んでおく。この時期は恐らく後述する如く10世紀末から11世紀初頭頃まで続くものと思われ、時間的な長さから考えると各遺構は更に細分が可能と思われるが、ここではとりあえず以上の2時期に

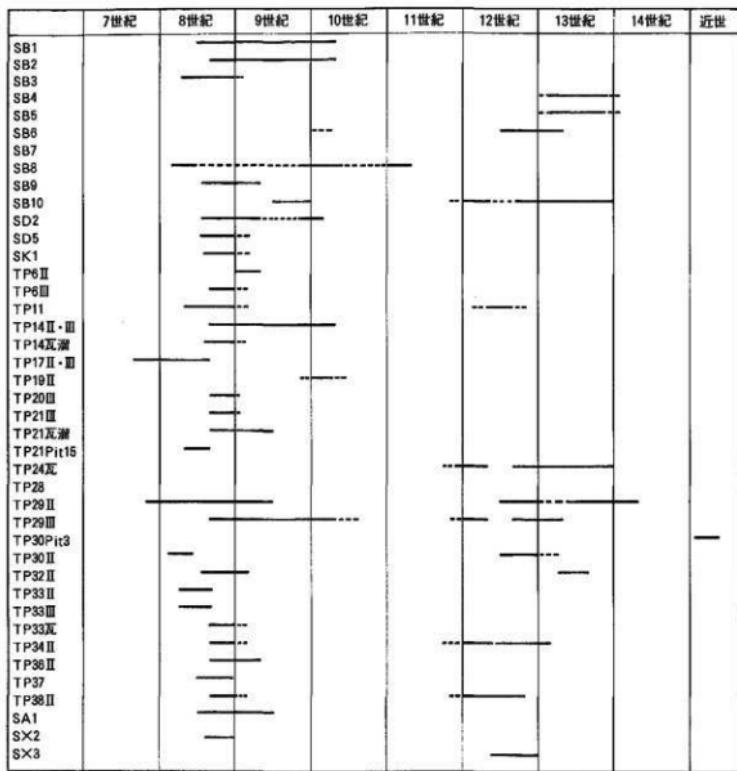


Fig. 16 造構別出土遺物時期変遷図

編年しておくにとどめたい。

7次にわたる調査結果にもかかわらず、各種造構の正確な名称や性格については殆どが不明といつて過言ではない。原位置をしめす礎石やその根固め石等が全く残存していないことから、本来の建物の規模や配置が推定できないのがその大きな理由である。あえて類推するなら、氏寺創建時造構のSB3は屏であり、SB8は金堂ではなかったかということ、そしてその後作られたSB1が塔跡ではなかったかという可能性である。しかし、SB7は後に改変された可能性が無い限り現状では東面する形をとるなど、一定の約束事に基づく伽藍配置を想定するのは非常に難しいというのが実情である。

何故このような結果になったのであろうか。理由の一つとしては、岩岐直の氏寺の建物を基礎にして、国分寺界格を機に増築しながら体裁を整えていった過程が、結果的に例を見ない伽藍配置になったのではないかと思われること。それと後世の造寺による改変の結果が更に伽藍配置を分かりにくく

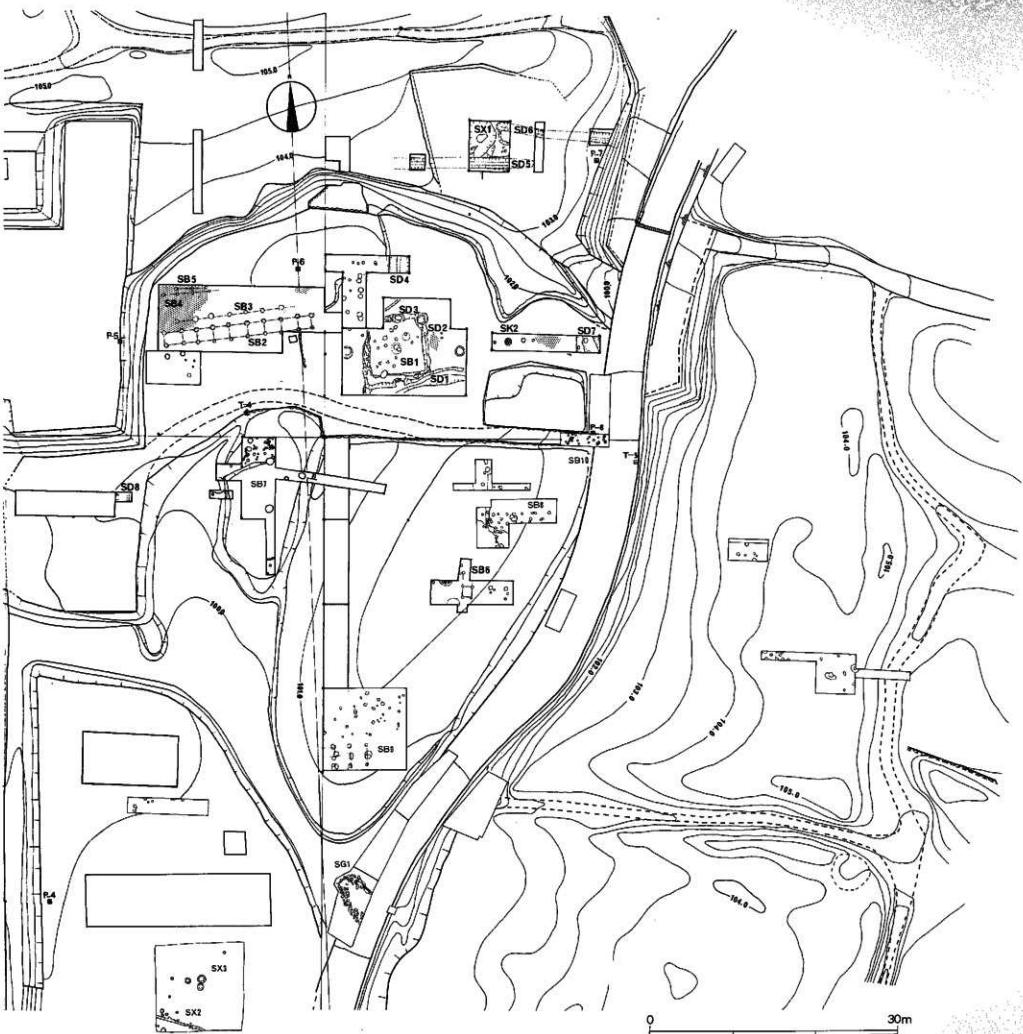


Fig. 17 遺傳配置図

している可能性。そして狭小な守域からくる地形的な制約もその原因ではなかったかと推定されるのである。

幕末に編纂された『岩岐名勝図誌』には当該地に阿弥陀寺・国分寺跡としては切妻造りの2棟の小歌が記載されている。享保八年(1724)、荒廃していた国分寺を再興するため経済力のあった阿弥陀寺を旧鷲分寺の地へ移して寺号の交代を行ったためで、小さな本堂と薬師堂を建立したとの記録が残っている。その位置はSB1, SB8付近に相当し、そうであれば旧嶋分寺遺構は江戸時代に再利用されたことになる。ここで某様の形が改変された可能性が生じてくる訳であり、伽藍配置混乱の理由の一つ目である。

岩岐島分寺は官寺として機能していた時期は出土土器から判断するかぎり、8世紀後半以降から11世紀初頭頃までであったものと推定される。嶋分寺として機能しなくなる理由としては律令制そのものの崩壊と、11世紀初頭の外敵（所謂刀伊の入寇）の侵攻による荒廃等もその原因として考えられよう。最後に鷲分寺の前身である氏寺を建立したといわれる岩岐直について考えておきたい。

『旧事記』の国造本紀に「伊吉島造、磐余玉穗朝、伐石井從者新羅海辺、天津水凝後、上毛布直造」の文がある。森浩一氏はこの伝承を磐余玉穗つまり繼体政権の頃、岩岐にいたと思われる天津水凝という人が新羅海辺にいた石井（磐井）の従者を伐ったものであり、磐井の勢力は新羅海辺ばかりではなく、対馬や岩岐にも人を派遣して掌握していたのではないかと推測されている。周知の如く、繼体政権の527年には磐井勢力と戦った大きな政治事件があり、戦いに負けた磐井は農前國上臘県に逃れ、その子葛子は糟屋屯倉を獻上して死罪を免れたという。繼体政権にとって糟屋屯倉を獻上させることは磐井勢力の息の根を止めるに等しい行為であり、もはや葛子の首をとる必要もなかったのだろう。

それはともかく、国造本紀の伝承が磐井敗戦とどこまで関わっていたのかは分からないが、伊吉島造の行為が結果的にその戦いに大きな影響を与えたとするなら、政権側にたって活動したその功績は大であったことは間違ひ無く、「このことが事実を反映しているのであれば、古墳時代後期における岩岐の古墳の大きさを実現させた遠因かも知れない」と森氏は推測されている。さらに、『日本書紀』巻第十応神九年夏四月の条「…岩岐直の祖眞根子」という者有り。其れ爲人、能く武内宿禰の形に似れり。獨武内宿禰の、罪無くして空しく死らむことを惜びて、便武内宿禰に語りて曰く、今大臣、忠を持って君に事ふ。既に黒心無きことは、天下共に知れり。願わくは、密に避りて、朝に参赴でまして、親ら罪無きことを辨めて、後に死らることを曉からじ。且、時人の毎に云く、「僕が形、大臣に似れり」という。故、今我、大臣に代わりて死りて、大臣の丹心を明きむといひて、即ち劍に伏りて自ら死りぬ。…」の記事が磐井の乱を念頭において述作されたものであり、その極めて重要な政治事件の中心部分に岩岐直の祖眞根子が登場することは、常日頃中央政界との深い接触があった結果ではないかとも併せて推測されている。

全国的傾向とは一致するものの、岩岐中央部に限定して100基を越す群集墳が出現するのは6世紀半ばからである。この群集墳はその後7世紀末頃までの1世紀にわたって築かれた古墳群で、その中に全長89mを測る双六占墳や、全長77mを有する対馬塚古墳などの前方後円墳に加え、円墳で直径45

m、高さ15m、石室の長さ16.5mの鬼の窟古墳など堂々たる大古墳が含まれる。さらには、これまで類例のない金銅製の馬具や、畿内系土器、陶質土器等を副葬していた直径66m、高さ10mの笠塚古墳などは、福岡県宗像市宮地獄古墳や熊本県江田船山古墳の副葬品に通じる内容の副葬品を持っており、単なる一地域の豪族には過ぎた豊かさである。

このような事実が磐井の戦いの直後からの現象と理解すれば、何故壱岐のような小さな島に、且つて338基もの古墳が築かれたのかの謎をとく鍵になろう。

一方、壱岐においては弥生時代の遺跡としては勝本町カラカミ遺跡、古墳時代から古代の遺跡については同じ勝本町串山ミルメ浦遺跡からそれぞれト骨や龜トが出土しており、「魏志倭人伝」の記述にあるト骨の風習が連続と引き継がれた事実が考古学的に証明されている。

さらには弥生時代以来、伝統的な海を生業とする海人集団がいることが同じ「魏志倭人伝」に書かれている。彼等は伝統的な漁業のみに従事していたばかりでなく、米を求めて南北に市羅するといった記事が見られるのである、そこにはすでに海人集団としての性格が色濃く反映されている。

一方これらの集団は、必ずしも平和的な交易活動のみに終始していたわけではなく、時には後世の明や李朝を困惑させた倭寇の如き行動に及んだのではないかと推測される記録が紹介されている。

その記事は新羅助貢王三年王(232)夏四月に「倭人にわたりて金城を開む。王、親ら出でて戰う。賊、潰走す。経験を過して之を追撃し、一千余級を殺獲す」と言うもので、時期的には卑弥呼の時代の頃のことである。中国「三国史記」の記録によれば、その後も倭の侵入は続くようであり、これが事実であれば、当時の倭人はすでに朝鮮半島への海上ルートの掌握と航海技術を習得していたと考えて不思議はない。ただ、一口に海上ルートの掌握といつても、その内容は一様ではない。潮流や季節風の知識は言うまでもなく、どの地点に暗礁があるとかの経験的で実際的な知識が相当必要とされる。観天望氣という言葉がある。雲行きや空模様などを観測して天気を予想することで、「西の空に雷が現れたらやがて突風がくる」とか「夜、西の空に稻光が見えたら高波を伴う突風がくる」といった類の一例であるが、気象学的に十分根拠があるので、観測機器がかなり発達した今でも特に海を生業としている人達にとって欠くことが出来ない重要な観測方法である。このような伝承が全国的に極めて多いのは、それだけ航海や海上での作業には危険が伴うことを示しているのである。

古代の航海が極めて危険を伴うものであったことは、例えば18回計画された道府使も帰船は15回しか実施されず、その内でも実に6回は各地に漂着したり遭難にあったりしている事実や、防人等のための駆逐を壱岐から対馬に送るルートできえも時には遭難した記録を見れば明らかである。そのような時期にあっては、この種の観測が占める比重はかなり大きかったことが想像されるが、それでもそれだけではなく、神位をトするという持喪を舟に乗せて航海の安全祈願を行なっていたのも、より切実な不安の現れであろう。いずれにしても、より安全な航海技術の確保や海上ルートを掌握することは大陸との交渉にとっては何にも増して重要であったはずであり、そのような技術集団を抱えることの重要性は計り知れないものであったと思われる。

平野邦雄氏によると、壱岐の古代豪族には二つの系統があるとされる。即ち、一はト部の系統であ

る。「壱岐縣主の先祖押見宿、祠に侍ふ」と記載されているように壱岐縣主の祖であるオシミノスクネが神代から龜トを奉仕して、その子孫がこの業を伝えてト部となつたという伝承から、オシミがト部となり、その子孫が「壱岐縣主」や「壱岐宿禰」になつたといふ説である。また、これとは別系統のものに壱岐史・壱岐連・壱岐造があるとされる。これは「ト部が神祇官や斎宮に龜トをもつて奉仕したのに、龜トとは関係なくより新しい大陸の文筆の技術を持って外交事務の担当者となつたものを指しているらしく、おそらく新帰化人であろう」との指摘である。壱岐史は『日本書紀』卷第二十九、天武天皇十二年冬十月に「姓を賜いて連と曰ふ」とあり、また姓氏録には「出自長安人劉家楊雍也」とあることから帰化人であることは確実であろう。

では、鷦鷯寺の前身の氏寺を建立していたのはどちらの系統の豪族であったのだろうか。この問題については、先に述べた局地的に築造された群集墳の存在が参考になる。白石太一郎氏によると、群集墳は「墳墓の造営そのものがきわめて共同体的な行為であり、その墳墓地域を共通することは同族関係の一つの表現方法」と規定されている。壱岐の群集墳の場合、例えは前述した双六古墳と笠塚古墳の間には、あらかじめ土壇を作り、その上に改めて封土を築くという同じ築造方法が見られ、また笠塚古墳と鬼の窟古墳の石室構築には同じ設計図が使われたのではないかと思われる程の類似点が見られるなど、これらの大規模な古墳の間には共通点が多い。一連の同族墓として考えればスムーズな流れとなる。

このように考えてみると、群集墳は壱岐の地方豪族であった壱岐直同族の一連の墓である可能性が高く、また氏寺を建立し得た壱岐直は帰化人系統ではなく、ト部系統の地方豪族であったと推定した方が自然である。神祇官として龜トを上著する系譜に加え、航海の技術や海上ルート情報をも掌握していた海洋集團としての壱岐直の一族は、時のヤマト朝廷にとって非常に重要な人物であったはずで、その事実が笠塚古墳の副葬品にも通じ、且つ氏寺の建立にあたっては、特に平城宮で使用された軒丸瓦の范木を所望することが出来たものと推定されるのである。

文 献

- (1) 芦辺町教育委員会「壱岐鷦鷯寺」芦辺町文化財調査報告書第5集1991
- (2) 芦辺町教育委員会「壱岐鷦鷯寺II」芦辺町文化財調査報告書第7集1993
- (3) 「国史体系」13巻所収 経済雑誌社 1906
- (4) 「国史体系」12巻所収 経済雑誌社 1906
- (5) 「国史体系」2巻所収 経済雑誌社 1906
- (6) 森 浩一「海の生活—玄海・海の海人」岩波講座 日本書紀第1巻 1993
- (7) 「日本書紀」卷第十七 邦體天皇二十二年冬「日本古典文學体系下」岩波書店 1965
- (8) 「日本書紀」卷第十 慶神天皇九年夏「日本古典文學体系上」岩波書店 1967
- (9) 長崎県教育委員会「県内古墳詳細分布調査報告」長崎県文化財調査報告書 第106集 1992
- (10) 長崎県芦辺町教育委員会「鬼の窟古墳」長崎県芦辺町文化財調査報告書第4集 1990
- (11) 梅原末治「日本古墳巨大石室聚成」京都帝国大学文学部考古学研究報告14 1937
- (12) 熊本県教育委員会「江田船山古墳」熊本県文化財調査報告書 第83集 1986

- (13) 古野秀政「奄岐国続風土記」寛保二年(1742)
同書によると奄岐にはかつて338基の古墳があったとされるが、現在は256基が残存しているにすぎない。これらの古墳はほぼ全島的に分布しており、築造時期も古いものは5世紀代にさかのばるが、中央部の群集墳はその数100基以上にのぼり、しかも時期的に6世紀中頃から集中して築かれたものと推定されている。
- (14) 勝本町教育委員会「カラカミ遺跡」勝本町文化財調査報告書第3集 1985
木村幾太郎「長崎県奄岐島出土のト骨」『考古学雑誌』第64巻第4号 1979
- (15) 勝本町教育委員会「串山ミルメ禮道跡」勝本町文化財調査報告書第7集 1989
- (16) 竹内理三「古代編 大和朝廷と奄岐・対馬」「長崎県史古代・中世編」所収 1975
- (17) 森 克己「遺唐使」至文堂 1955
- (18) 平野邦雄「九州における古代豪族と大陸」古代アジアと九州 九州文化論集 1973
- (19) 「日本書紀」卷第十五 順宗天皇三年春「日本古典文學体系 上」岩波書店 1967
- (20) 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」「古代学研究」42, 43 1966

図 版

PL. 1 調査風景



TP39 表土剥ぎ



TP39 遺物出土状況
(南より)

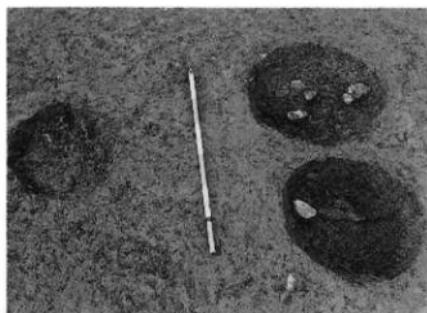


TP39 遺物出土状況
(西より)

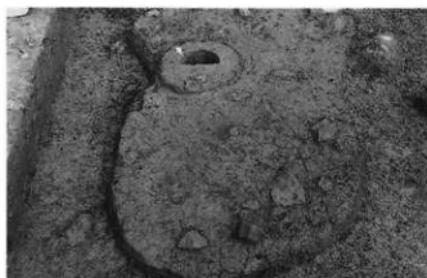


炉跡と遺物出土状況
(北より)

PL. 2 遗構・遺物出土状況



TP39 II 層 炉跡出土状況



TP39 III 層 烧土炭化物集中地点

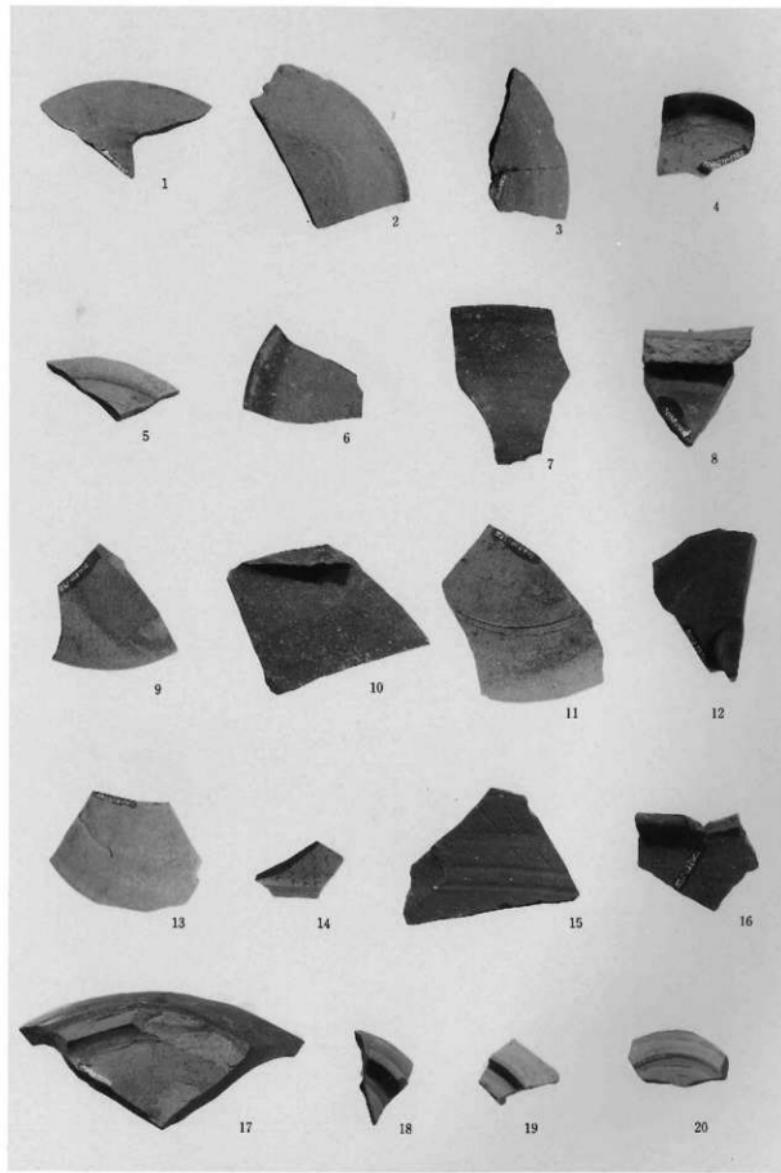


TP39 北壁土層断面

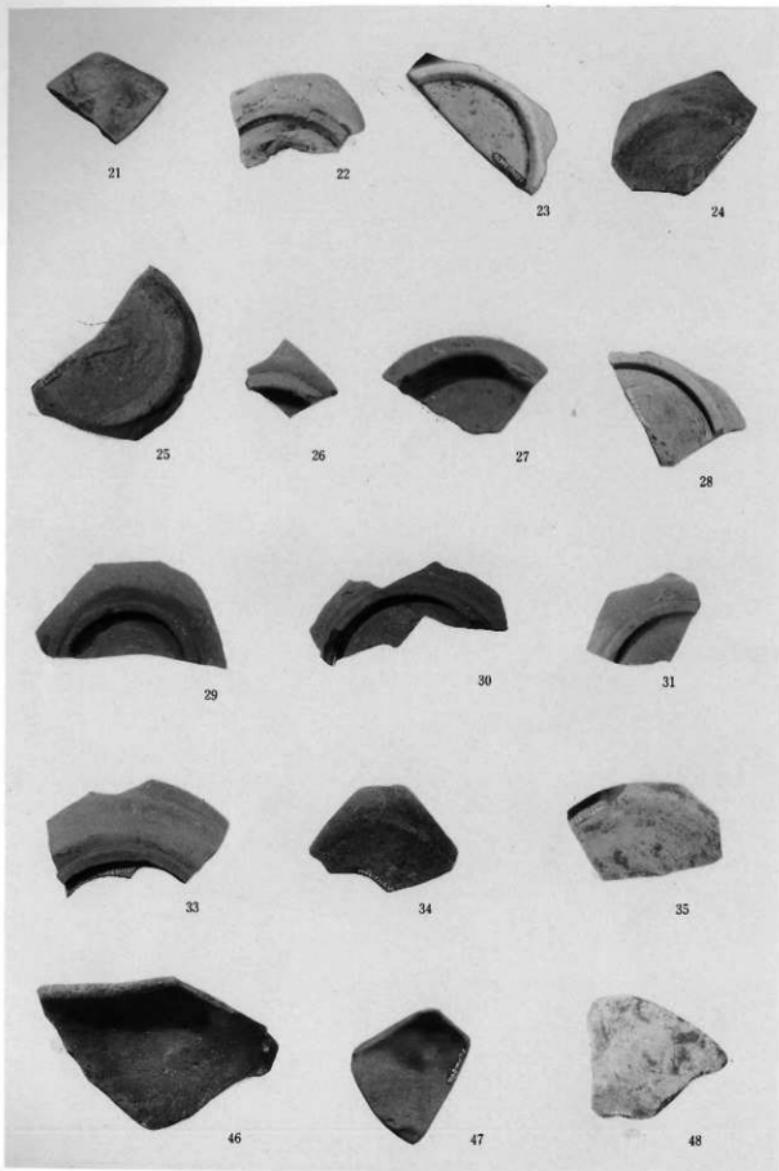


TP39 III 層 遺物出土状況

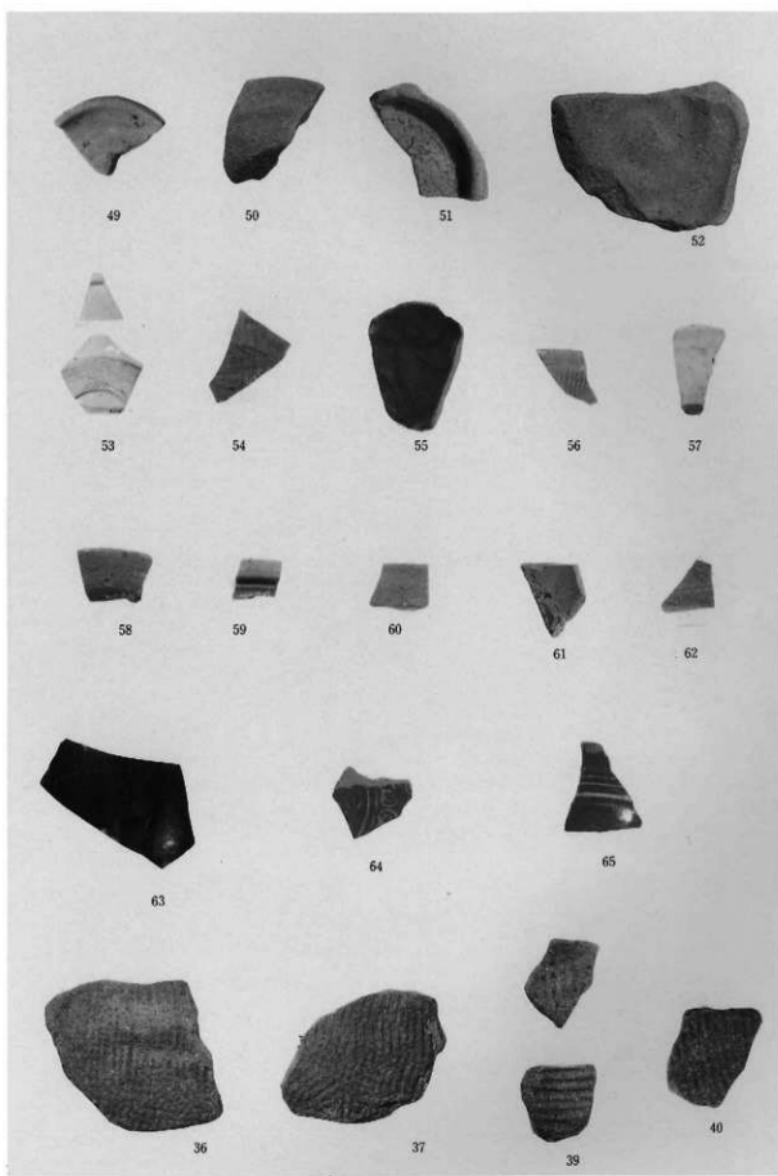
PL. 3 出土遺物（須恵器）



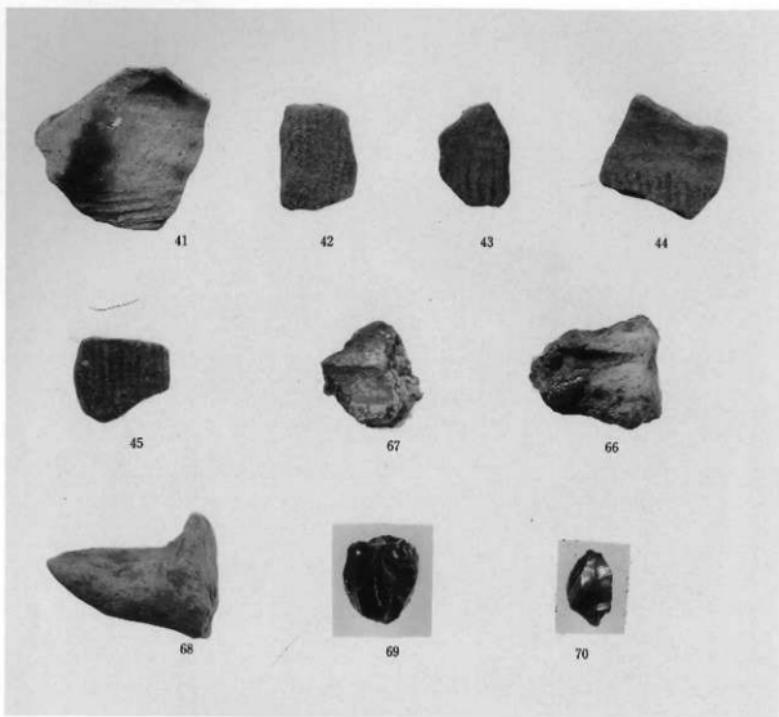
PL. 4 出土遺物（須恵器）



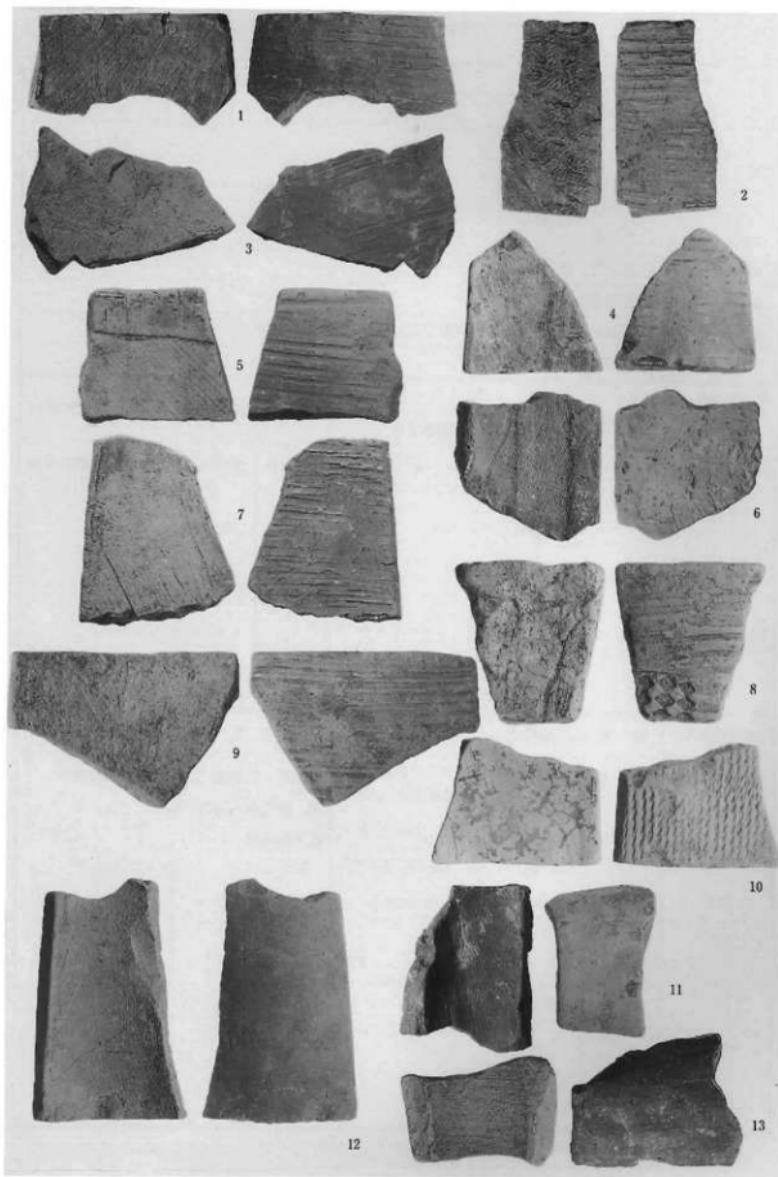
PL. 5 出土造物（須恵器，製塙土器，輸入陶磁器）



PL. 6 出土遺物（土師器，羽口，把手，石器）



PL. 7 出土遺物（瓦）



報告書抄録（記載様式）

ふりがな 書名	いきとうぶじ 壱岐鶴分寺 Ⅲ						
副書名							
巻次							
シリーズ名	長崎県芦辺町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第8集						
編著者名	高野晋司						
編集機関	長崎県教育委員会						
所在地	〒850 長崎県長崎市江戸町2-13 電・0958-26-5010						
発行年月日	西暦1994年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
壱岐国分寺跡	長崎県壱岐郷芦辺町国分本村触	42423	63	33°48' 129°41'	19930927 19931015	100m ²	遺跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
壱岐国分寺跡	寺院	奈良時代 平安時代 中世	製塙遺構 炉址3基	土師器、須恵器 瓦、鋸造具（羽口） 輸入陶磁器	僧房関連遺構か		

長崎県芦辺町文化財調査報告書第8集
壱岐島分寺Ⅲ

平成6年(1994)3月31日発行

発行者 芦辺町教育委員会

壱岐郡芦辺町芦辺浦562番地
〒811-53 ☎09204-5-1111

印刷所 昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町100-2
〒854 ☎0957-22-6000